
初心者神様の世界管理日報

恵斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初心者神様の世界管理日報

【Nコード】

N3035F

【作者名】

恵斗

【あらすじ】

はぁ・・・まさか私が神になるなんてねえ・・・、まあなつてしまいましたし、元に戻りたいとも余り思いませんし、やりたいようにやらせてもらいますか。

設定集（ネタバレ多）（前書き）

プロットのな使い方しちゃってますココ^^^；

設定集（ネタバレ多）

この物語は今私達が暮らしている現実からちよつとだけ未来で少しだけずれた平行世界、その世界に住み社会の枠から外れている1人の男性、彼が彼の世界でもありえない現象によって異世界へと飛ばされ、神として今までとは全く違った日々をすごす物語です。この出だしは設定集となっていますので第0話からお読み下さい。

設定集

人物

ケイナルド・グランツ・オブゴート（ギルド名”ケイ”） 22歳

男 本編主人公

職業 神（結界術師・国営ギルドランクZナンバー0）

武器 神作刀

術 神想力 魔術科神属性（便宜的に）

固有装備 双神極

通り名 現人神

とある公立高校を卒業し、4年後には武術の免許皆伝、その後別世界の神となる

ほぼ何でも有りの文字通り“最強”

ケイナ・フォンツ・アリスト・リーロン 18歳 女

職業 リーロン王国第2王女（魔術剣使い・国営ギルドランク＋A＋）

武器 片手両刃剣

術 魔術科火属性

固有装備 無し

リーロン国第2王女、姉が1人、弟が1人の3人兄弟の次女

16歳の時お披露目パーティと言う名のお見合いをさせられる事になり国王である父と賭けをする、そして婚約者候補を全て決闘で下して賭けに勝ち、20歳までの自由を手に入れる

クフト・フォンツ・イレクト 21歳 男

職業 リーロン国親衛第4隊

武器 長槍

術 精霊術科土属性

固有装備 無し

専属でケイナ王女を護衛する親衛隊の1人

イレクト家の次男

家系的に選民意識が高い

本人は選民意識が高い風よそおに装よそおっているだけで実はどこに行っても弄いじられる

『ボケ』気質

カロリアと同期入隊

カロリア・フォンツ・エレンティム 20歳 女

職業 リーロン国親衛第4隊

武器 両手剣

術 魔術科水属性

固有装備 無し

専属でケイナ王女を護衛する親衛隊の1人

エレンティム家の三女

秘書的な見た目と同一の性格でクフト限定?の『ツッコミ』気質
クフトと同期入隊

アーレン・フォンツ・クランドル 37歳 男

職業 リーロン国親衛第4隊隊長

武器

術

固有装備

マツコイ・アルフォマ 42歳 男

職業 国営ギルドファスゴト支部の支部長

武器

術

固有装備 無し

コーフイリア・アルフォマ 17歳 女

職業 国営ギルドファスゴト支部の受付嬢

武器

術

固有装備 無し

国営ギルドファスゴト支部のアイドルとして支部のメンバーから絶
大な支持を得ている

マツコイ国営ギルドファスゴト支部長の娘

コーネリス・ドレン 33歳 男

職業 ドレン傭兵団団長

武器 双剣

術

固有装備

色々な設定

主人公の元世界

- ・ 正暦を用いる、作者の世界とは違う平行世界の1つ
- ・ 時代的には作者の世界の30年後ぐらいで日本は既にアメリカに合併され、アメリカを中心とした国と中国を中心とした国、そしてロシアを中心とした国の3国まで統一されている
- ・ 個性重視主義が加速し、親子間であつても作者世界と比べると絆関係が弱い
- ・ 異世界の術のような物は作者世界と同様存在しない

異世界

- ・ 神と呼ばれる職業？が存在し、世界の自然を導く“大いなる意思”と自身の行動によって変える“小なる意思”を使い世界を管理する
- ・ 太陽が3つあり、大きい方からチイ・ニイ・ミイと呼ぶ
- ・ 公転周期の影響からチイが日の入りを迎える頃にミイが日の出を迎えるため真つ暗にはならず夜らしい夜がない
- ・ 言語はそれぞれの自国語と共通語があり共通語は日本語
- ・ 通貨は統一されており、1000ドン＝1エル（1エルは作者世

界の1万円程度)

- ・ 1ドン・5ドン・10ドン硬貨が銅貨で、50ドン・100ドン・500ドンが銀貨、1エル・5エル・10エルが金貨、その上に100エルの術処理された紙幣があり主に国庫などで使用される
- ・ 時間も統一されており1日24時間で朝8時を起点として1つ時、その後は4時間事に計6回その時間の数+1鐘を鳴らす

- ・ モンスターが存在し、便宜的にモンスターとか魔物と呼ばれ人型のモンスターは魔族と呼ばれている

- ・ 魔族や魔物は汚れた大気エネルギーに侵食され自我を失ったものの事で、血液の色が通常とは異なる

- ・ 3つの大陸が存在し、主人公の居るスタット大陸が一番大きい
- ・ 主人公の居る大陸を中心とすると西側の大陸はチユート大陸と呼ばれ、獣人やエルフなど亜人種がそれぞれ割拠支配し独自の文化・生活をしている為、一部を除き他大陸との交流などは殆ど無い

- ・ チユート大陸は他大陸との交流が殆どない為、地図や地名・国名など殆どの事柄が不明

- ・ 主人公の居る大陸の南東に一番小さいエンドル大陸があり、こちらは大大陸名がそのまま国名で全土が統一国家で支配されている

- ・ 主人公の居る大陸は大小合わせて10国ほどで、大国3中国2小国5で構成されている

- ・ 力石・・・大気中のエネルギーが自然に固まって出来た石の事で、人工物も存在するが天然物より性能が低い

- ・ メコア・・・穀物の一種、乾燥させた状態から水分を吸収させると体積が3・4倍にもなるので携帯食料用に栽培され加工される、

アロンド皇国の主要産物

- ・ ケチュシー・・・携帯食料の一種、シチューの素と塩などの調味料、メコアと一緒になってるルー状に固められた物、塊1個でほぼ1食分、味付けによって数種類存在

- ・ 術薬・・・粒が小さい力石に治癒術の効果を閉じ込めたもの、大体は服用するもので術の効果に力石の力を全て使うので使用すると

消失する、石の品質や術の種類・精度により価格もピンキリ

国

リーロン王国

・世界に3つある大陸の内、スタット大陸の南東の一部を治める術
大国

・スタット大陸内では一番新しい国

・国法により男児のみが王位継承権を有し、後継者争いを無くす為
王子は1人までと決まっている、そのため男児が1人生まれるまで
王の子供は増える（それにより時代によっては王子1人のみという
事も）

・今代は王女2人と王子1人だが、本来王をサポートするべき後継
者の王子はサポートを始める15歳を過ぎ16歳になるも肉体的・
精神的に弱い為、21歳になる第1王女が王をサポートしている

・術に関する事は亜人種を除けば世界トップクラスで、各国の要請
により人材を派遣して外貨を得ている

・リーロン国は1精霊術師が興した典型的な術大国で中立国家を宣
言している、であるにもかかわらずスタット大陸の中で3指に入る
大国

・法律により上級術以上が扱える者は軍か国営ギルド、宮廷術師に
所属する事が義務付けられている（ギルドに所属する場合はA+
となる）、またその登録の事を一般的に『法定登録』と呼ぶ

・軍の体制は正規兵5人で1分隊、5個分隊で1個小隊25人、5
個小隊で1個中隊125人、5個中隊で1個大隊625人、5個大
隊で1個連隊3,125人、5個連隊で1個師団15,625人、
5個師団で1個軍78,125人

・一般兵でもギルドランク換算でD〜C+の実力を持ち、それ以下
の者（戦闘能力は有るけど術資質が低い）は州軍に配属される

・親衛隊・・・各直系王族の専属護衛部隊で国王は1個小隊、王妃は3個分隊、王子・王女は2個分隊あり今代は国王を護衛する第1隊から末っ子王子の第5隊まである

・王都ラーセンを囲んで4大州があり、それをまた囲むように10州ある国内体制で州都の名前がそのまま州の名前になっている

・主人公が降臨したのは4大州の中、首都の南側に位置するファスゴト州

・主人公の出身地としたタツワオ村はリーロン王国で聖地とされている国内最高峰トツゴ山の麓ふもとにあつてファスゴト州のさらに南の辺境州コロツテ州西部にあつた（トツゴ山に棲む魔物の襲来により壊滅）

・トツゴ山は聖地の為、麓ふもとを全方位城壁のような強固な壁で囲われており、6箇所ある門をタツワオ村のように俗称として門街と呼ばれる村や町が管理している（聖地に人を入れ過ぎないようにする為と、逆に聖地のお陰で強力な魔物や魔族を外に出さないようにする為）

・貴族のみ『フォンツ』の称号を与えられ、王族のみ両親のファミリネームを並べて表記する（例：ケイナ・フォンツ・アリスト・リーロンとはケイナという名前の王族でアリスト家とリーロン家の間で生まれた事を表し、後ろの家名が上位で同位の場合は父親の家名）

・貴族に階級は存在しないが、エレンティム家とイレクト家とクランドル家はリーロン三大貴族と呼ばれ王国内では屈指の権勢を誇る

・リーロン王国とエンドル大陸は点々とした島で繋がっており、島の領有権を巡って昔から仲が悪い

アロンド皇国

- ・リーロン王国北東の国境と接している小国家の1つ
- ・長年の同盟関係と条約からほぼリーロン王国の衛星国家となつて

いる

- ・ 国家間の関係は頗る^{すこぶ}良い
- ・ 穀物の一種メコアが主要産物の穀倉国家
- ・ リーロン王国との国境線は明確にされているが出入国は完全にフリー
- ・ 相互防衛条約によりリーロン王国より2個師団が駐留

術

・ 魔術と精霊術、神想力の3種類で、障壁系や結界系など補助系術は、習得さえ出来れば術種・属性に囚われず誰でも使用可能

・ 治癒術は完全にその人の素質に依存し、とても高い術資質を持つてゐる人でも使えない人は使えない、故に数も少ない

・ 各術にはそれぞれ詠唱開始コードがあり、魔術は「（属性）よ、」精霊術は「の精霊よ、」神想力は「神よ、」から始まるが無詠唱でも行使可能（無詠唱の場合、術強度が術錬度によるが約3割〜7割減）

・ 各術は術の強度・効果範囲・消費量などを鑑^{かん}み、初級・下級・中級・上級・最上級に分けられており、初級Ⅱ日常的な術、下級Ⅱ戦闘ⅡⅤ、中級Ⅱ戦術ⅡⅤ、上級Ⅱ戦略ⅡⅤ、最上級Ⅱ国家ⅡⅤとなる（余談だが作中主人公が初級術でモンスターの大群を殲滅しているがそれが何処まで常軌を逸しているかは・・・）

・ 魔術は体内の生命エネルギーと大気中のエネルギーを使った物で作者世界ではオーソドックスなもの

・ 精霊術は世界に須らく存在する精霊の1身と契約を交わし共に行動するもの

・ 魔術と精霊術は先天的に決定されるもので、生まれる時に魔術か精霊術かどちらかと、属性1つが決まる

・ 精霊術に決まった場合、生まれたと同時に契約する精霊が本体もしくは本体の一部と共に召喚され契約される

・魔術と精霊術は同一人物が両術行使できず、また属性も2属性を行使する事は不可能

・属性は一般的な光・火・水・土・風・闇が全体の96%程を占め、そこから波及する属性は4%ほどしか居らず精霊の種類と同じだけあると言われ、属性の全種類は分かっていない

・属性の種類も全体把握はされていないので、一般的な6大属性以外はほぼ独学となる

・神想力は唯一後天的なもので、神への信仰を力とし、一定以上の信仰がなければ使えない

・神想力は術系統自体が1つの属性で、後天的要素である為に魔術と精霊術との併用が可能

・3種の術系統は、ある一定以上極めると“世界”より固有装備（神器・神からの贈り物）が下賜される

・固有装備を下賜される事は非常に稀で、今現在全世界人口約15億人に対し固有装備持ちはスタット大陸に6人、エンドル大陸に2人、チュート大陸に7人の計15人＋主人公、その中で2つ固有装備を持つものは各大陸に1人づつ3人（全て女性）＋主人公のみ

・固有装備にはまだ2段階上がり、下賜からもつと極めると装備が意思を持ち、その次に人化する

・“世界”が出来てから固有装備を人化させた者は居らず、意思を持たせる事もただ一人所持者が亡くなる間際の一言のみ

・全ての術には固有の波があり、それを術波動という

・術資質・・・体内エネルギーの余剰分の量を表し、多い程高位術を扱える・・・一言で言えばMP

・術強度・・・術の威力

・術錬度・・・術の慣れ具合

術効果

「ハイムープ」火・風属性が扱える下級魔術。速度を上げる術だが

身体能力を上げているのではなく身体の周りの環境を変えている。

「変則障壁 ウォール 円斬」補助系術である初級障壁術。術者から範囲指定した所まで地面と平行に、そして円状に形成する障壁。変則障壁と名のある様に本来の使われ方ではない。

「完全遮断結界」補助系術である上級障壁術。範囲の中の姿・音・気配など全てを遮蔽する。

「水のカーテン」水属性が扱える下級魔術。術者の周囲で水が高速に回転し術者を守る。

「台風の目」風属性が扱える中級魔術。術者の周囲で風が高速に回転し術者を守る。

ギルド

・リーロン国営ギルドの事で、各国独自にもあり体制も違う

・ギルド長はリーロン国軍務大臣や他大臣と同列に扱われており、執務室も王宮内他大臣と同じフロアにある

・ギルド構成員は、戦闘・情報・搜索などに分けられ、戦闘を主としている人を一般的にハンターと呼ぶ

・ランク分けされておりリーロン国通常軍二個大隊に相当する実力を持つランクZと上からS・A・B・C・Dに加えてランクEがある

・ランクZはナンバーズ制で0～9まであり、固有装備を所持する事が前提で現在3名＋主人公、2種固有装備持ちは1名＋主人公（ナンバー0～9までであるが固有装備所持者の少なさから空席が埋まった事は開闢前かいびやくからない）

ナンバー0は神のみのナンバーで何故か“世界の根幹”の一部らしく大いなる意思による変更が効かない（この世界を作った神の趣味と思われる）

・ランクS～Dは更に細分化さいぶんかされており、下からD D＋ ＋D＋
C・・・ ＋A＋ S S＋ ＋S＋となっている

・ランク分けは完全実力重視ではなく、各級術（初級・下級・中級・

上級・最上級）の行使が条件の1つとなっておりE＝初級、D＝C＋Ⅱ下級、＋C＋ⅡA＝中級、A＋Ⅱ＋S＝上級、Z＝最上級の術を扱えないと成る事が出来ない

・ランク分けの仕方によりランクは低いが実力は物凄い、という人も存在する

・ランクEは見習いで殆どの人間はここから始まる

・登録は首都王宮内及び4大州州都にあるギルド支部でのみ受け付けられているが支部では＋S＋ランクまでしか認定・登録できない
・ナンバーズ（ランクZの別称）のみ王都においてギルド長が直々に認定・登録する

職

・基本的に自分の中で一番のものを定義し、下から「使い」「士」「師」「導師」とランク分けされている。

・「使い」は1つでも使えれば名乗れる

・「士」は通り一遍いっぺんの事が出来れば名乗れる

・「師」は大体の事が出来れば名乗れ、「使い」や「士」を弟子と出来る

・「導師」はその系統のほぼ全てを網羅むしし、新しい術等を1つでも開発すると名乗る事が出来る（故に時が進む程数が減る）

・結界術・・・属性術をほぼ諦め、結界や障壁術を専攻した結果就く事ができる職業、世界的に見て「師」までいくのは稀まれ

・魔術・・・まあそのままの存在、指輪から剣、槍まで多種多様な道具に術制御機能をつけている事が多い

・魔術剣・・・力石を加工して武器に埋め込み、術の効果を武器に付与して戦う戦士の事で、一般的に術資質の低い者がなり武器の補助を受けて行動するが、武器がなければ普通の兵士と変わらないという側面もある

・精霊術……まあそのままの存在、指輪から剣、槍まで多種多様な道具に術制御機能をつけている事が多い

・精霊術剣……ほぼ魔術剣使用と同じだが契約してる精霊に力石に入ってもらって補助を受け行動するが、武器がなければ普通の兵士と変わらないという側面もある

設定集（ネタバレ多）（後書き）

本編に出てくるたびに追加していきたいと思います。

第0話

「ふう・・・」

ここ数日のとてつもなく波乱万丈すぎる事態に一区切りつき、一人
タメ息なんぞついてみる。
全てを思い返してみると脳内がスゴい事になりそうで、少しずつ少
しずつ思い出してみる。

第0話（後書き）

とまあ、始めたわけですが・・・。

確実に不定期更新なので、・・・まあ、なんていうか、あゝ気長に？
お待ち下さいな^^；

なんとなくブログにもならない様な、とてつもなく短い文章で
区切ってみたけど・・・「さつさと次出せ！」ですよネエ^^；；

ってか本文より長い後書き・・・アハハ^^；

第1話

まず・・・3日前。

正確には正暦2031年10月18日土曜日だったが、日本に居たはずの私は異世界に飛ばされた・・・というか、召喚された。

この言葉だけを聞くと「何言ってるんのお前、黄色い救急車（実際には無い）に乗って一生出てこれない病院に入院しろ？」となる。

・・・が、実際に異世界に私が居るのだから“現実には小説より奇なり”を地でいつてる。

何故って・・・太陽が3つもあつて周回軌道の関係上からか夜らしい夜（暗闇）がないのが分かりやすい異世界ぶりだろう・・・。

元々居た世界から腕時計（ソーラー発電なので止まる心配なし）を装備したまま持つてきてるので5日経った事はわかつている。

でもまあ薄暗くなってる時間とか、自分の世界と変わらない様だったのには少し救われた。

その上、普通に化け物が存在して襲われるしすれ違うほとんどの人は何かしら武器を持っている。

日本ならすれ違ったほとんどの人が確実に銃刀法違反で検挙な状態だった。

しかもどうやら魔法まであるみたい・・・。

その日、私は数ヶ月前に就職？（強制だった）した師匠でもある祖父の経営する道場で夕方5時からの小学生を対象とした若年部の指導を終えて休憩してた。

道場は幼児からお年寄りまで、体力作りからファイターまで、をモットーとした簡単に言えば全ての武術をいいとこ取りした祖父が開祖の道場だった。

私はその道場で3番目の免許皆伝状を受け取り、そのまま導師とし

て就職・・・させられたわけだ。

因みに1番の免許皆伝状を祖父自身が持つてゐる、・・・その辺りウケ狙いなのかよく分かつてはいないがウケ狙いだったらあらゆる意味で面倒なので聞いてはいない。

そして数日前から誰かに見られている様な、観られている様な、視られている様な・・・そんな感覚を意識のある時間ずっと覚えていた私は初めてその感覚が発生している場所を突き止め、視線を合わせたところから始まる。

「・・・え？何コノ丸いの？？」

今私が居る部屋は導師と祖父がつけた役職・・・まあ世間一般でいう師範っていうか先生・教師専用の休憩室兼ロツカールーム+事務室も兼ねられてる部屋で、視線を向けた場所にその様な物はなかったはずのモノがそこにはあった。

水晶の様に向うが透ける程透明だけど、不思議と色を感じ尚且つ生き物の様にその色が蠢うごめいている・・・そんな不思議な直径50cm程の球体がずっとそこに在ったかの様に鎮座していた。

「こんなの無かったよなココに・・・」

指導する前にココに来てタバコを一服し着替えた時にはこんな物ココには無かった記憶がある。

というか10畳程の部屋にロツカーから事務机3セット、仕切りで区切られた応接セットまで入ってるこの部屋にそんな大きな球があったら邪魔でしようがないはずだ。

「まあ、師匠か誰かが私の指導中に・・・って思いたいけどなあ・・・」

ここ数日のあの感覚がこの球から発せられている以上それはないなとありえない現象を前に冷静を装って球を観察する。

「・・・いつまで見てんの、さつさと来る」

「喋ったし！・・・ってうわっ!？」

次の瞬間、気付いたら上も下も無い周りも真っ暗な空間に居て・・・。

でもその球体は先程の距離にすっかり見えてるからなんだかなあと、外面だけはせめて冷静に・・・内心はもう脳ミソがペースト状になってそうないグチャグチャな状態で呆^{ほう}けていた。

「・・・はい、到着つと。ココは世界と世界を繋ぐ刻の狭間で、君の所の言語で言えば亜空間みたいな所。僕は、んゝ世間一般で言う神ね。で、最近・・・って言うても500年ぐらい前からだけど、他の世界が増えてきて管理が行き届かなくなってきたから、君にとりあえず世界を1つ任せようと思っ^てて連れてきたの。まあ人から神へ昇華つて事ね。ん、心配しなくても大丈夫だよ、ちゃんと“適任者”を選んでるから。君の仕事は大きく分けて2つ。1つは世界管理、っていつてもその世界の意味決定は君だからこんな風になればイイなあって思っ^てていけば大体は自然とそうなっていくからでもその世界の人間とか動物の様な意思を持つ者は、君が元人間で元から神じゃないから管理外ね。元から神だとそっちもすんなり行くから僕は羨ましいんだけど。・・・つと、だから君は世界に対してはその意思・・・あ、僕達は“大いなる意思”って言ってるけどソレを使っ^てていれば問題は無い。だけどたまに人間とかって僕達の意味に反してとんでもない事をしでかすじゃない？だからソレを上手くコントロールするのがもう一つの仕事でそっちは“小なる意思”って言ってる。まあその世界の中の君自身に関しては大いなる

意思でどうともなるから。知りたい事があつたら大いなる意思に検索かければいいし、やりたい事があつたらそれに合う様に自分を創ればいいし。そういった事は世界に行ってから追々（おいおい）理解すればいいとして・・・ココまではいいかな？」

・・・私のこの状態で今の台詞を全部きちんと理解できている“人”は一体何人居るのでしょう・・・

「・・・理解できるわけあるかつ!!」

つと、普通はこうなるだろう？

「もゝ面倒な人だなあゝ。もう一度言うよ？ココは「マテッ!」・・・なに？僕だつて忙しいんだからね？」

話を初めからやり直され尚且つ途中で止められたその球体はなんとなくムツとした雰囲気でもって私を見てると感じるが、だからって先程と同じ事を繰り返させる気は毛頭ないわけで。

「だからつて一息に喋られても理解が追いつかないだろうがつ!つていうかその一息長過ぎだつ!初めから少しずつ、相手の理解が追いついてから次を喋った方が結果的に早く終わる事を学習しろ!」

そう言われて変な球も考えを改めたのか、承諾の意思・・・らしきものを感じられたのでそのまま待つてみる。

「んゝわかった。じゃあ初めから・・・今居るこの場所は「刻の狭間」だろ？私が居た地球とは別の、世界と世界を繋ぐ為の世界。」・・・
「うん、んで僕は「神」だろ？胡散臭さも神級だし。」・・・
「うん、で、君を連れてきた理由は「私に神なんてやらせようとし

てんだろ？適任だとか色々言っただけで世界1つなんて私には大きく過ぎて無理だと思うぞ？」………一気に言っても理解してない君？……あゝ理解してるしてないじゃなくてそもそも信じてないと……。」

「ん、普通に考えて信じてるって方が無理でしょ。というか聞く気なんて更々（さらさら）ないから。出口何処？帰るし。」

信じてるって方が他人との線引きが親族にまで完全に及んでる現代人的には無理でしょ。

「あゝそうだよなぁ……最近そういった風潮のお陰でコノ説明部分に時間がかかったちゃってサアゝ普通にウザいんだよネエゝ僕だって管理してる世界いくつもあるわけだし忙しいんだよ……。」

なんて、いきなり愚痴モードに入ってる変な球。

「だからさつさと理解する！コレは妄想でも夢でも幻でもなく、げん・じ・つ。」

「あゝはいはい、私は神に元居た世界とは別の世界を管理するべく選ばれコノ刻の狭間に放り出された人。選ばれた理由ってのが世界の管理者が増え続ける世界に対応し切れなくなってきたから。んで私はその世界に行つて“大いなる意思”と“小なる意思”を使って管理していくと。……こんな御託はどうでも「ん、ちゃんと理解してるっばいね。」……あのなゝ」

コノ理解してもらえたみたいで結構結構的な雰囲気の変な球どうにかしてくれませんかコノ世界の神様とやら。

「じゃあとつととその世界に送るから。後よろしくね」

「おいマテッ！！話は・・・って聞けええつ！！！！！！」

つていつてる傍^{そば}から私の身体が透け始め、外面も取り繕えなくなつて慌てる慌てる大いに慌てる。

「もう無理いゝ　いつてらっしやーい。あ、忘れてた。他の神と話したい時は世界の外に出るって念じればココに来るから多分誰か居るでしょ。んじゃあねえゝ頑張つてー」

この、恨まれて然るべき状態でお別れの言葉を聞いた直後に私の姿はコノ場所から消え、意識を失った・・・ように思う。

・・・コレが、あの糞馬鹿の名前まで教えてもくれなかった一日目・
・・・マジ最悪、人生最大の悪日決定。

第1話（後書き）

漸く、2話目が・・・連載の次話投稿の仕方が分からずに色々試して早数時間とか

・・・多分絶対誰かやってる事をやってましたハイ。

時間でなおすと数時間だけど日付になおすと3日とかフト気付けばマニユアルあるじゃんorz・・・とか・・・ハアorz

第2話

んで、2日前。

気が付けばはつきりと自覚できる、完全に自分が行った事も見た事もない世界が周りに広がっていたと。

「・・・・・・・・・・。」

ぐるーっと周りを見渡してみると、まず正面に森。

人の手なんて一切入ってない事を窺^{うかが}わせる、鬱蒼^{うつそう}とした、森。

右、・・・森。

人の手なんて一切入ってない事を窺^{うかが}わせる、以下略。

左、・・・森。

人の手、・・・以下略。

後ろ、・・・以下略。

見た事もないような樹木や刺々しいまでに色鮮やかな草花・・・。

「・・・・・・・・何処だよここはっ！・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「いかにいかに、冷静になれ冷静に。第一こんな所じゃやまびこが返ってくるだけで誰も返事はしてくれん。」

強制的に社会人にされたあの師匠の教えを思い出しとりあえず心を鎮める為に古武術にあった呼吸法を実践する。

「フウ・・・・・・・・さてと・・・・・・・・どうしたもんかな。」

落ち着いたのはいいがさつきと変わったのは内心だけで、五感から入ってくる情報には一切の差異がない。

「………、……やまびこか、じゃあ近くに見晴らしの良い所があるはずだから行ってみるか……。」

中学生3年の夏から独り暮らしをしている私はその長さから極自然と身についてしまったスキル、独り言を喋りつつ周りをよく見渡す。

「お、こっちは遠くの樹木が少ない。」

ぐるつと360度見て、ほぼ後ろを向いた時に新たに認識した事に従って歩を進める。

こんな森の中で距離感覚なんて無意味だろうからあまり記憶してなかったが多分300m程進んだ所で森が途切れ始め、500m程歩いた所で目の前には長大な溪谷が広がっていた。

「……画像で見た北米連邦のグランドキャニオン並だなこの壮大さは……。って、マジ……。ですか。」

開けた場所に出た事で辺りの地形と共に太陽を拝む事ができて、一安心すると共に超然とした新事実を見せ付けられ瞠目する。

「太陽？が3つもある……。」

大きさも大中小と3種類で一番大きな太陽？（コレが一番見覚えある太陽に近い）は地平線のすぐ上にまるで日の入りのような赤い感じで存在し、存在を思い出した腕時計の時間から今が元世界の日の入りとほぼ同じ18時33分頃ではないかと推測する。

しかし中程の太陽は17時ぐらいのところにあるし、一番小さい太陽にいたってはまるで日の出後の様な位置に存在していた。

あの球との会話時間とかからして19時を回ってるはずなのになあ

と思いつつその日の出の様に出てきてる変な太陽？を観察してる私。それらがちょうど溪谷の裂け目の端と端にある様に存在していた。方位をそのままここに当て嵌めると東西にはしまった溪谷のようだと、今見てる時計の文字盤の隅にある日付を見て驚いた。

「あれ？1日経ってるし・・・それに月、にしてもおかしいか・・・」

丸24時間経ってる事にも驚いたが、目の前の事象である月？に驚いて・・・あり得ないほどの姿形と明るさを持っているソレをじっと見つめて・・・と、そこである驚愕の事実に気付いた私。

「・・・ってマジで異世界？ってかあの糞球の言ってた事が事実！？それにあの空間の中ってどういう時間の進み方してんの！！？」

今更な気がさつきからぶんぶんしてたはずなのに今頃になって気付いた私・・・。

「ってか、不可思議な事の連続だったからなあ・・・脳が処理を遅らせてやがったか？」

変な球にそこから向けられてたあの視線、真っ暗な部屋、その部屋での変な会話、そしてココ・・・

「・・・なるほど、処理が追いついてきて初めてあの会話の中身を思い出した、か。」

あの胡散臭さ最高Lvの球との会話を思い出した私は意識して“この世界”を視てみる。

「ふうん・・・」

時間経過とか金銭単位とか言語とか、コロツと替えられても“世界”にはさほど影響が少ないものは私がここに神として来た事で私の常識に替わってる、のか？それとも元から？・・・でも影響が大きい魔法の有無や時代背景など骨格的なものは上手く残しつつ私に馴染みやすい様になってる感じからして私が来たから替わったと考えるのが妥当か・・・時代的には産業革命以前って感じだな。

1日は24時間だし1000ドンで1エル（1エルが正暦2000年ごろの1万円ぐらい）だし其々（それぞれ）の国の言語はあるけど世界共通言語が日本語で、・・・盗賊やら山賊とかも普通に居るしモンスターも出る・・・と。

魔法は3種類あって1つは人の生命エネルギーと空気中のエネルギーを使ったオーソドックスな魔術、1つは自然界にすべか須らく居る精霊との“契約”による精霊術、1つは神・・・私か・・・への信仰を力に変えた神想力・・・か。

その3種類の魔法にもやっぱり属性があつて、人はどう足掻あがいても1つのみ、魔術と精霊術は生まれた時にどちらかかと扱える属性も契約できる属性も決まってるし、神想力のみそれ自体が1つの属性・・・か。

という事は神想力を使える人だけは、生まれた時に決まった属性と神想力の2つ属性を持てるって事だな。

生まれた時に神への信仰なんてあるわけないし。

まあ、私は何でもオツケーなんだけど。

後、其々の力を極め一定水準に達するとその人専用の固有装備が神かし（私）より下賜される。

この辺は多分“大いなる意思”が勝手にその人に合った装備を下賜しているのだろう・・・。

魔術か精霊術と、神想力を極めた2属性持ちの人は2つ固有装備が・・・あゝ歴史上ほとんど居ないのな。

んで、今現在の固有装備持ちは・・・15人、その内2属性持ちの人は3人、か。

世界人口が15億人程の世界で、15人か・・・。

それはそうと2属性持ちが3人とも女性ってどうなの？1人はもう婆さんだし・・・と思いつながら他の事も吸収していく。

これが“大いなる意思”なのかその世界の事が、まるでずっと前から知っていたかの様に、すんなりと頭の中に入ってきてすっかりすっぽりと脳ミソに収まっていく。

まるで今まで空いてた空間にパズルのピースが嵌っていく様なその感覚に、知らず神経が昂ぶっていく・・・。

「ふん、しょうがない・・・帰り方も分からないし帰らなければいけない様な大切な物（そもそも“世界”を視た感じその世界から消えればその物が無かった事になるみたいだから）もないし、やってやるかつ！まずは・・・街か村を探さないと？」

と、後ろを振り返って硬直。

「探すまでもないんだっけ・・・」

我ながらアホな発言に独りしか周りに居ないのに頭をポリポリと掻いて照れてみる。

探さなくても“大いなる意思”に検索をかければ分かるのだ。

無意味に一頻り照れた後で“大いなる意思”を使って一番近くの人里を“検索”してみる・・・と同時に人里に行くのならと自らの服装を“この世界”がよく知る物へと変える様に念じてみる。

「・・・ハハ、ホントに出来ると驚きを通り越して呆れ笑いしか出てこない・・・。」

人里の場所も分かり、服装もRPGゲームにありそうな旅人の服っぽいのに変わった。

「街まで歩くと丸一日以上かかるのか・・・それにしてもこの世界に合わせた旅人っぽい服装を念じたけど、なんだかビミョウに動きにくい・・・それに武器とか防具とかどうするかなあ」

・・・ん？

その服の感想とか動きやすいように少し弄ったりとかしてる内にフト、違和感に襲われて考えてみる。

「あゝ、そつか・・・武器や防具を当たり前の様に考えてたからか・・・。」

自分の体内時間ではほんの数十分前まで人や動物を相手にする武器や防具とは全く、全然、コレでもかという程縁のない世界に居た自分。

戦争や紛争といった人と人との殺し合いは、世界が3国にまで統一された事で全く無い訳ではないが無くなっていた。

それに確かに私は武術をやっているが、それは相手を“試合で倒す”事が前提で“殺し合いで斃す”事ではない。

それがいつの間にかフト自然に「どういうのにしようかな？」ぐらいに考えてる自分が居る事に半ば愕然と、半ば当然と理解する。

「・・・コレが神って事ね。意識も多少引つ張られるわけだ・・・。」

グルルルルルウウウ

フムフム・・・と納得の首肯（独り暮らし必修スキル第2弾）をしていたらそんな鳴き声と共に四足の獣らしき動物が森の中から現れ

た。
目が3つもあって牙や爪もかなり切れそうな・・・狼？それが3匹も。

「んゝ君達、この私に逆らうって事がどういう事なのか分かってやっっているのかね？」

崖間際の小さな空き地である私の位置は3m程後ろが崖、前4・5m程離れた場所に3匹の・・・多分モンスター。

妙に巨大で攻撃的な牙や爪だし目が3つて・・・ねえ？

御丁寧に幅一杯、ほぼ等間隔に並んで逃げ道を塞ぐようにしている。ビミョウに絶体絶命パターンっぽいし、崖を落ちたら流石に怖いので神らしい？威厳をもって引いてくれる様に促してみる。

もうこの時点では“神”をある程度理解しているので、例えばあのモンスター共が襲ってきたとしても空を飛ぶなり何だつて・・・思っ
てはいる。

いるのだが、やっぱりというかまだ慣れていない内にそういったモノを見せ付けられると多少なりとも動揺してしまうのは元人間だから・・・と思いたい。

グガアアア！

そして、それでもやっぱり襲ってくるのがモンスターというモノなんだろ・・・。

仕方がないので身体の手前10cm程の所に不可視の障壁を張ってモンスターを足止めする様に念じてみる。

無論、横から襲ってこない様に脇の地面一杯まで張る。

本来、普通の人なら多少なりともイメージを固める為に詠唱が必要な“魔術”なのだが、それこそ誰も居ない今は知った事じゃない。

何故そんな目と鼻の先に障壁を張るのかと聞かれれば「面白そうだ

から。」と冗談を言い、ホソネは一番油断してくれるから・・・と答えるだろう。

ドガッ

ドゴッ

ガンッ

予想通り、面白いように壁にぶつかる間抜けなモンスターちゃん。
2匹は鼻っ面から逝った様で前足で鼻っぽいところを押さえ悶えているし、1匹は足の爪だった様でこれまた悶えている。
一応痛覚はある様で、意味のまるでない安堵感を覚える。

「・・・自分でやっておいてなんだけど・・・なんかシュールだ・・・」

一頻り悶えたモンスターは烈火の如く怒り狂いながらも壁の存在を知り、穴が無いが壁の周りをウロウロしていたが私は私でソレをボーーーーっと見ているだけではない。

「さて、どう片付けようかな・・・」

「ん？アレは・・・追い詰められてるわね・・・急がないと結構ピンチだわ」

目当ての獲物を探して森の中を探索・・・という名の遭難（煩いわね！）をしたあたしは遠くにその獲物らしき影に追い詰められる人影を発見し全力で走りだす。

今居る場所はある長大な溪谷の中の小さな谷間を挟んだ狭い空き地なのでぐるりと回り込む様に行かなければならない。
何せあたしは今二重の意味でピンチなのだ。

「ええい、間に合つてよお」「ハイムーブ！」

人影が斃されるピンチ、獲物が獲られるピンチ（こちらの方はあの状況なので心配はあまりしていない）があるので補助魔術をかけて最大速で走る。

「さて、どう片付けようかな・・・」

まだ諦めきれないのか、障壁の向こう側でウロウロしているモンスターの片付け方を考えていたらその後ろから人間らしき人影が猛烈な勢いで走ってくるのが見えた。

「ん、あれに任せようかな。」

あの人間やメてる速度で走ってくる人間に任せれば多分大丈夫だろう、と私は私で自分の装備に関してどうするか考え始める。

一方モンスターの方もその人に気付いたようであちらに襲い掛かっているからちよつと良いだろう。

「・・・大丈夫！？今助けるからっ！・・・ハアッ！」

やつぱりというかその人間・・・女だった事というか少女だった事に多少？驚いたが、1つ首肯を返したのみで考えをグルグル歩き回りながら纏める。

やはり剣は必須だな・・・その上で・・・あゝガントレットにしよう。

で、近接戦闘時はガントレットから剣が伸びて装着されてる状態、持たなくてもイイから指弾も撃てるし戦術に幅が出るし、なにより剣を弾かれて取り落とす事もない。

出現時は剣がガントレットの中に収納され普通の盾付きガントレットで・・・盾の部分は戦闘中随意で肩の近くに浮き最大8つに分裂して防御する、そのまま盾でもいい・・・うん、イイねえ」
で、私は神想力を極めし者（神だし当たり前）だからソレが2つで両腕に装備と。

隠し玉として神想力を弾に変換して撃つ魔銃にもなると・・・イイ・
・イイよそれっ！

あ、それと剣を出した状態で魔銃を撃とうとすると剣やガントレットが変形してスナイパーライフルみたいになって射程「視界の長距離射撃が可能・・・良過ぎるだろソレ・・・

近接から長距離まで完全網羅、しかも防御も完璧・・・後、平時には何かアクセ・・・両手中指に指輪としておくか。

とりあえず、そこまで考えて目の前の女性から見えないように身体の後ろで具現化しておく。

「・・・っと！・・・聞こえてるの！？ねえってばっ！！」

「・・・何？ああ、終わったの？ありがとう、助かったよ。」

「・・・全然御礼言われてる気分にならないのはどうして・・・？」

半分以上トリップした状態になってしまっていたが私の障壁をガンガン叩きながら吼えてる人間？の煩い声で意識が戻ってくる。

どうやら歩き回ってる内に障壁から離れていたらしく、彼女も障壁にぶつかった様で顔を抑えながら多少機嫌が悪そうにこちらを見ている。

そして斃してくれた事に御礼を述べたのだがあまり伝わらなかったようで、不機嫌そうに無然とした感じた・・・。

「・・・ま・まあとりあえず、怪我は無いようね？何であんたこん

な所に居るのよ？武器も持たずに・・・自殺志願者？」

目の前の女性はそう言って胡散臭げに私を見ている。

この世界において武器も持たずに街の外に出るといいう事がどういう事なのかは“世界を視た”時に学習したのでこういう反応は理解できる、理解できるが納得はしない。

誰だって正常だと思っている自分に向かって頭ごなしに破綻者と言われれば・・・ねえ？

「・・・自殺志願者ではない。」

「あつそ、じゃあ何でこんな場所にモンスターに囲まれて・・・居たわけ？」

必要最低限の返事しかしてないわけだがあつさりとスルーされて内心のみでコケて更なるボケ？をかましてみる。

「んゝ追われて？」

「何故疑問系・・・まあいいわ。仕事も終わったし、このまま放置じゃ後味悪いから街まで一緒に戻ります。」

しかしスルー、しかも勝手に自己完結、且つ強制連行ときた。

いつの間にか倒したモンスターから必要なものは回収していたらしい。

「あゝ・・・ま、いつか・・・」

言いたい事を言ってさつと身を翻し歩き始めたその女性について歩き出した私。

まだ名前も聞いてないんだけどな・・・色々と諦めて後についていく。

そうして街に向かって歩き出したのが・・・運の尽き、だったのかもしれない。

第2話（後書き）

ふう・・・覚悟も何もしにただなんとなくで始めたけど・・・
難しいのなんのって・・・プロットなんて作ってないから修整修正
また修整^^；

第3話（別視点）

「こんな数、何処に居たんでしょうねえ・・・」

「知らないわよ！」

「なんで!？」

「何でこんな事になってるわけ！」

「あたしは人を助けて街まで同行と言う名の護衛までしてあげて、善行してるはずよ？」

「まあ後で手間賃ぐらい・・・とは思ってるけど。」

「それがどうして、助けられてた人と凡そこの辺りに棲んでるモンスター全種類のしかも大群に襲われて囲まれ背中合わせに睨み合ってるわけ!？」

「んゝざつと、200匹ぐらいですか・・・」

「この状況で数なんてどうでもいいわよ!! あんたの防御障壁は大丈夫なんでしょうねえ!？」

「・・・ええ、大丈夫です。」

「その間が嘘臭いんだけど!？」

「あたしは人を助けその人と共に町に帰る途中だった。」

「助けたこの男がココ変ですよと帰り道から踏み外さなければ。」

「ちよつと、何処に行くのよ。」

「ああすみません、そこに妙に歪んだ結界らしきモノがあるので・
」

「ふうん・・・で、そんなモノほつといて帰るわよ。」

「あゝちよつと、遅かったようです。」

その後は前述の通り、男が近づいた所^{せい}為？で壊れた結界らしきモノの中からモンスターが湧くわ湧くわ湧くわ・・・。

助けた男が慌てて障壁を張ってくれなければ今頃あかし達はあのモンスター達の餌になってたはず。

悔しいけどあかしは目の前の事だったのにも拘^かわらず度肝を抜かれて棒立ち状態だったわ・・・。

それほど突然だったのに障壁展開を間に合わせたその男は、良く言えばおっとり・・・な人。

顔はそこまで悪くはないけど、背もそれほど高くない中肉中背で闇に溶け込みそうな黒髪黒目、全体的に印象が薄いというか間者にびったりな顔というか・・・。

まあ悪くは・・・言わないでおくわ、今はそのおっとりな人が障壁を張っているからこそ生きていられるのだから。

「ところで、今更な気がしますけど・・・お名前は？」

「・・・、・・・ハア!？」

生き残れたら・・・改めてこの男を地獄へ送つてやろう。

そう心に決めて、一度だけコノ男を睨みつけてから周りをもう一度見てみる。

今モンスター達は一生懸命障壁を壊そうとガンガン攻撃してて、僅^{わず}か10cm程の距離しかないその薄そうな障壁の破壊とその後の自

分達の末路を想像して・・・それはそれは恐ろしい状況だったりするのよ。

もう少し間を取って障壁を張って欲しかったと思うと共にコレが破れたら一巻の終わりという緊張感があたしの神経を徐々（じょじょ）に磨^すり減らしていく。

「じゃあ・・・えっと、俺は居ないと考えて・・・んゝ貴方一人なら何匹イケますか？」

そんな状況の中でもまだ話す気なのかおっとりと質問してくるこの男にイライラしてくるわ。

「・・・あんたコノ状況でそんな質問する！？全く、あんたが変だからって近づくからこんな事になってるのよ！？あんたどうにかしなさいよ！」

昂^{たかぶ}りながらも磨り減ってる神経におっとりと間の抜けた様な台詞にいい加減ウンザリしていたあたしは・・・ええ、醜^{みにく}くも八つ当たりしましたとも。

でも返ってきた返事は驚くほど冷静で冷徹な言葉だったわ。

「・・・ええ、貴方の言うとおりですね。もちろん、私が殲滅するつもりです。・・・では合図と共に真上に10mほど飛んで頂く事は可能ですか？」

「え、ええ・・・できるわよ？」

八つ当たりの反応だと分かったはずなのにも関わらずおっとりとその中に隠された冷静さと冷徹さを失わずに居るその男にちよっと、ちよっとだけよ？・・・畏怖する。

だって、術を編んでいる事が見た目で分かる程の力って・・・そう
そうお目にかかれるものじゃないの。

そんな、あたしの反応すら認知外だとも言いたげに1つ首肯を返
すのみで何やら魔術を放とうとしているその男。

「ん、準備できたんですけど貴方の方は大丈夫ですか？」

2秒と掛からず声をかけられたのでちょっと慌ててしまう。

200匹程も居るモンスターを一撃でどうにかするのなら最低でも
上級の術を使う必要があるし、それはギルドランク+A+のあたし
でも10秒以上はかかるものだから。

「えっ？あ、待つて・・・いいよ？」

「じゃあ・・・5・4・3・2・1・ハイ！」変則障壁 円斬」っ
！」

言われた通り10m程ジャンプしてみたんだけど・・・上から見た
その光景は・・・虐殺・・・に等しいものだったわ・・・。

下を見るあたしの視界全てを光るモノが円状に駆けていったかと思
うと、あたし達を囲んでいたモンスターの群れを真横（地面と平行
に）に一刀両断・・・本当に殲滅、だったわ。

硬さを特徴とするモンスターも居たのにアッサリと。

でも一番驚いたのはそこじゃなくて、その光の中にあつた樹木が一
切無傷っぽって事。

つまり術を高度に制御して害をなすモノだけに術の効果を与え、硬
さに関わらずに斬ったという事。

ストッ

「ちよつと！今の何よ！！？見た事も聞いた事も無いし、準備時間にしてはありえない威力でしょ！」

着地した途端に詰め寄ったわよ！

だってそんな普通の人には高度な術が使えるのならあんな崖の先で追い詰められてるわけがないもの。

それにあたし、魔術剣使いだけどあんな術見た事ない・・・。

「えつ？えつと・・・何、ナニどうしたの??」

いきなりのあたしの剣幕に驚いてるみたいだけどそんな事あたしの知るところじゃないわ！

「どうしたのじゃないわよつ！今の術はなんなの！？あんなの持つててなんでたつた3匹のモンスターに追い詰められてたわけ！？そもそもアンタ何者！！？」

あたしもそこそこの名の知れた、国内第3位のファスゴト州じゃ1番のハンターだという自負は持ってた。

それに自分の属性に関していえばほとんどの術はまだ使えない物もあるけど知識として持っているとも思ってたわ。

それが何、両方ともばつさりと覆されてるじゃないのよ・・・そりゃ問い詰めるわよ、あたしのアイデンティティーに関わるものと、自分の正当性を無理やり構築してみろ。

「・・・あゝ、・・・あれはただの初級物理障壁「ウォール」、だよ？ただ使い方と効果範囲を変えただけで。それに追い詰められていたわけじゃない、考え事があつて放置していたんだ」

ええ、衝撃の事実にあたしは何処かのお馬鹿さんの様にただポカン

としてしまいましたわ。

誰しもが一度は使った事のある、ただの物理障壁・・・しかも初級。そもそも障壁系や結界系の術に関しては、エネルギーをそのまま固めたりして使うのでどんな属性を持っていたとしても習得できる術。

もちろん、属性専用の障壁術や結界術の「水のカーテン」や「台風の目」といった術もあるけど。

しかもモンスターを放置ですってえ！？

まああの「ウォール」の使い方からして多分その通りなんでしょう
と思ってしまうのだけど・・・なんか悔しいわ。

「・・・使い方と効果範囲・・・」

「そう。あ、立ち話もなんだし歩きながらで・・・」

そう言つて、今度は彼が先に街に向かって歩きだした。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。」

彼について歩きながら混乱気味の頭の中を整理してみる。

あたしが属する魔術剣使いとは、力石と呼ばれる空気中のエネルギーが固化して出来た石を加工して武器に埋め込み、術の効果を武器に付与して戦う戦士を指す職業。

本来は魔術科（魔術か精霊術で魔術の方を持って生まれた人）の術資質の乏しい人間が武器の補助を受けて行動する職業。

因みに精霊術科の人がそれをやると精霊術剣使い・・・契約してる精霊が力石に入ってもらって術を使うと・・・まあそのままね。

つまり、剣がなければ術を知らないただの剣士とほとんど差が無いのよ。

あたしの場合はそこそこっていうか上級魔術を扱えた上で、好きで目指した魔術剣使いだからいいんだけど。

つと、問題はこの男が使った術が誰でも使えれば属性専用術がとてつもなく色褪^{いろあ}せるという事。

「・・・うん、ある程度分かってるみたいだから言うけど。私の術は自分の属性術を知識だけに留めて障壁術や結界術に絞って修練した結果だからねえ」

「なるほど・・・ねえ、じゃああんたは・・・その・・・術資質が・・・？」

「ん？いや、寧^{むし}ろ豊かな方でしょ」

聞きにくい事を聞いたのにあっけらかんと、しかも自分で上位の方だと言うコノ男・・・

言われて思い出したわ、このあたしが畏怖してしまう程の術波動を・
・

「はあ？つくづく分からない人ね・・・あ、軍人？」

術資質というのはこの国では重要なもの。

何故ならこの国は精霊術師によって建国された国、だから術資質＝権力となりやすいのは世の理ってわけよ。

しかも法の縛りで上級術以上を使役可能な人は軍か国営ギルドや宮廷術師に所属する事が義務付けられているわ。

「ん？違うよ？」

「じゃあギルド？ファスゴト州じゃあんた見た見た事無いけど・・・」

「まあね、私はそのギルドに登録する為に旅してるんですよ。」

この国は円形に近い国土のほぼ中央に王都があり、その外周を東西南北を境目にして4州・・・そのまた外周を10州が囲む国で、ギルド登録は首都かその外周の4州でしか出来ない。

「あら、そうなの。・・・ところで、あたしはケイナ。あんたの名前は？」

「・・・ええ」と、ケイ？」

「ケイナよ、あんたは？」

「だから・・・ケイ、ケイナルド」

「・・・、・・・。わかった・・・ケイ、って呼ぶ事にするわ・・・」

「ん、了解・・・」

・・・ほぼ同名って事が発覚した瞬間だったわ・・・。

第3話（別視点）（後書き）

はい、んゝ暇をみつけては書いて書き直して・・・

第4話

そうして今から、近くの街に向かおうとしているわけだが・・・非常に困った事態になってるんだこれが。

「あんた本当に着の身着のままでも何も持っていないわよねえ・・・」

現在地から街までは普通に移動して約1日、しかも出会った時点で夕方日の入りの時間帯。

当然森を抜けた辺りで野宿となるわけだが・・・

ケイナの言う通り、私はさっき創造した装備以外何も持っていない。

「全く、どうやってココまで来たのかしら？」

「んゝほら、私には類稀たぐいまれなる障壁術や結界術があるから？」

「・・・とってつけたような理由の言い方ねえ」

物凄い疑ってる目で私を見てますこの人。

まあ確かに、こんな返し方をされたら私もそんな反応するし、真実を暴露したところでやっぱ頭おかしい人か！となるのがオチ、と・・・

「それじゃ実演しますよ、・・・」「完全遮断結界」

仕方がないので、そう言って今考えた術を行使する。

「え！？消えた！！何処いったのよ！！？」

一瞬だけ術を発動させて、驚いたところで解除する。

「私は一步も動いてないから。姿・音・気配・術波動とか、人や獣が気付く要素を全部結界に閉じ込めただけです」

あゝまた、かわいいより綺麗な子がポカンと口を開けて呆けている様は……ちよつと、いただけないですね。

「……クチ、開いてますよ？」

「……あ！？あ・ああ・あんだ、……はあゝもう何も言う気が起きないわ……」

まさかこんな男が法定登録だったなんて……とかブツブツと独り言にしては大きい声で言いながら自分の野宿装備を広げている。分からないでもないんですけどね、今の術は完全に上級術ですから。

「ん、後は結界ね。……物理結界も必要かしら？」

なんて気を取り直したのかこちらを警戒したように呟いて、それでいて値踏みするように見つめてくるコノ人。

申し訳ないがその手の冗談にノる私ではないのですよ。

「……無駄です。私の得意術をお忘れですか？」

そう言つて、逆に意味ありげに見つめてさし上げました。

ノりはませんが、斜め上を目指すのが私です。

ココに来る前はよくそれで知り合いに言われました……

ちよつとだけ前世界の事を思い出しながらケイナを見てみると、頬を引き攣らせ苦笑いのような……何ともいえない複雑な表情で私

を見ていました。

「もちろん、初対面の女性を襲うなんて不埒な真似は誘われない限りしませんよ」

「え・ええ・・・そうよね。誘われない限り・・・ね・・・うん」

少しかだけ間を開けてから自分ではにっこりとした笑みを浮かべ、安心してもらおうよう心掛ける。

その笑みを受けてか全面的な信用はされていないでしょうが、それでも一定の信用は得たらしく1つ肯く^{うなず}と背囊^{はいのう}から術道具らしき物を取り出していた。

「・・・ところで、それ使い捨ての簡易結界ですね・・・良かったら私が張りますよ」

そう言つて、さっきのとはほぼ同じ術を今度は半径5mの円形に張る。それからその結界を維持させる為に人工力石を作つて術を安定させる。

結界術は覚えればほぼ誰にでも出来る術だけど、道具として結界術を作ろうとするととても難しくとても高価なものでもある。

だから余裕の有り余る人は大体今のように自分で術をかけて、自作の人工力石に刻み込んで必要な時間安定させる。

人工力石を作るのも障壁・結界術と同じで属性関係なし（その人の属性石にはなる）だけど、かなりの消費量だったりするから本当に余裕が有り余つてないと出来ない。

「・・・へえ、ガラスみたいね・・・って、しかも出られるの！？」

「ん？はい、張る時に入ってた人は出入り自由にしておきました・
・その方が貴方も何かと安心でしょ？」

さっきのとはまた微妙に違う結界を張った事でまた驚いたのか、ケイナは疲れたようにため息をついて今度は携帯食料と調理道具を背囊から出し始めた。

「・・・疲れたわ、早く食べて早く寝ましょ・・・」

そう言つて準備を進めていくケイナ。

何気に私の分もあるようで、二人分の食事を作ってくれている。
が、私はちよつとドキドキしていた。

さっきの2つの術、上級術を殆どタイムラグ無しに行使していたからで、大いなる意思による知識で上級術はそこそ長い詠唱を必要とし発動まで時間がかかる事を知っていたから。

別に女性の手料理が初めてだからとかそういうのではない・・・
・・・気を取り直して、さて気付くかなあと思いながら相槌を打つ。

「あ、私の分まですみませんね・・・」

「いいわよ別に、一人だけ食べたつて気分悪いもの・・・」

そう言いながらテキパキと調理し、あつという間に完成・・・。

手渡された即席の皿には干し肉と木の実の入ったシチュー・・・の
ようなお粥・・・のようなもの。

シチューのルー・・・ケチュシーは携帯食料の中でも割と優秀でルーはもちろん、塩などの調味料や米に似たメコアと呼ばれる穀物も一緒にになっている。

それを液体で戻して他に何か具を入れてちよつと煮込む、とメコアが炊けて何倍にもなるので実はケチュシーだけでも十分美味しくて

お腹は膨れる。

全部大いなる意思からの情報だけど。

検索をかけつつ手馴れてるなぁと思いその事を聞いてみる。

「ずいぶん手馴れてますけど、もうこの稼業長いんですか？」

「そうねえ・・・16の時からだから約2年ってところかしら？」

はい、今度は私が口を開けてポカーンとする番でした。

「え・・・今18歳！！？若っ！！」

「・・・ちよつと、それは一体どういう意味なのかしら・・・説明してもらえる？」

ん、確実に地雷を踏んでましたねえ・・・多少自覚のある事なのかこちらを見るケイナの顔がとてつもなく怖いです・・・。

「ええと、18に見えないほど綺麗で大人な雰囲気を持ってたんで私と同じぐらいかと思ってたって事ですよ」

「・・・ふうん、話を聞いていると片田舎から来たみたいだけど・・・そんな処世術を何処で学んだのかしら？」

好転はしたものの追及の手はまだなくならず、逆に増えてるよ・・・

「・・・処世術？どこが？」

「・・・素、なのかしら・・・まあいいわ、食べたらさっさと空いた皿を寄越しなさいよ」

ブツブツ言いながら手を出して皿を要求するコノ人。
なんだかなあと思いつつ、追及の手を逃れきった事に安堵して空いた皿を渡す。

「ごちそうさま、美味しかったよ・・・さてと」

「そりやどうも、って何処に行くのよ？」

片づけをしながら徐に立ち上がった私を見て問いかけてきたのでもう1つ驚かせてみる事にする。

「ん、私が結界範囲から出たら力石にケイナの力を込めてみなさい」

「?・・・わかったわ、・・・ん・・・これでイイ？」

少しふざけて上から目線で指示を出してみたんだけど、私が今度は何をするのが気になったのかあっさりと素直に行動されてちよつと・・・つまらない。

「・・・うん、じゃあおやすみ・・・明日の朝になったら自分でその力石を破棄してね」

「?・・・いったいなんなの？」

やはりというか理解できないようなのでヒント代わりに結界を叩いてみる。

「あ・・・」

「うん、私の張った結界だけどケイナの力で変質させた・・・それで私も入れませんから安心して寝なさい」

ん、またポカーン顔を見られて満足満足。

今度は割りと早く立ち直ったみたいだけど、その顔がどうやって？と物語っていた。

「・・・君は結構知識欲が強いみたいだからちよつと説明すると、その結界の物理障壁の部分だけをケイナの力で変質させてる。だから術行使者の私にも声は通るしケイナの姿も見えてる・・・その結界を張ったのは私だが変質した事によって、その時中に居たケイナにしか解除は出来ない」

「・・・・・・・・。」

「まだ聞きたい事ある？」

「あ、うん・・・いえ、無いわ・・・」

「どっち？」

「あるけど、無い。聞いたら聞いたで眠れなくなりそうだから・・・おやすみ！」

くふふ・・・強制終了パターンですか。

明日は質問攻めを覚悟しなければいけないかもしれません・・・。それでも、近くの木に登って寝る準備をしながらこう思う自分が居るのでした。

中々楽しいじゃないか・・・と。

第4話（後書き）

設定集作ったらそちらばかり熱中・・・全部使えるかな・・・or
z

第5話

「さて、まず何から聞こうかしら？」

朝、普通に起きて支度して、街に向かつて歩き出してから暫く^{ひまじ}たった頃・・・思い出したようにそう言って歩きながら私の顔を見てるケイナ。

うん、夜の間にモンスターが近づいてきたりとか、そういったハプニング一切なしでちよつと暇だなあと思ってたところだったんだ。

「・・・ん？」

「まずは・・・、あなたいくつなの？」

「そっちかいっ！・・・で、イイのかな？」

見た目や今までの多少の会話からしてそういったボケはかまさないように見えていたんだが、どうやら違ったらしい・・・。

「ん、ただのツツコミね。じゃあその調子で、あなたギルドへ法定登録する為に行くのでしょうか？」

でも私のツツコミは平凡過ぎてあまりお気に召さなかったのかニコリともせずに次の質問。

・・・何か反応が欲しいものです。

「・・・どうだろう？旅の途中でそう聞いて、行けと言われたからココまで来てる」

「ふうん、・・・あなたどこから来たの？」

「ん、どこからでしょうね？」

早速答えずらい質問がきて、ちょっと困ったけどそこは大いなる意思・・・ズラアと検索して適当な村を探す。

質問攻めされるのは分かってたんだから昨日の内にある程度調べておけば良かった・・・と後になって気付いたが、多分異世界召喚なんて事があつて気付かない内にストレスと疲労が溜まっていたのだろうと自分で折り合いをつけてみる。

「・・・真面目に答えなさいよ、それとも話せないのかしら？」

そう言うのと急に剣に手をかけ臨戦態勢になる私の・・・連れ？

連れでいいよなあ？うん、いいんだうんうん・・・なんて考えてたら独り暮らし必修スキル第2弾のフムフム首肯をやってたらしく、次の瞬間には剣を抜かれ剣先は私の首筋にピツタリと。

私、こんな事されるような事何かしましたっけ？

「・・・何の冗談？」

「はっ、冗談ですって・・・あんた何者！？」

ん、完全に本気です・・・どうやら不法入国者とかそんな感じに受け取られている様です・・・。

この世界で私はそんな罪人などに見える外見なのでしょうか・・・？

「何者と言われてもねえ・・・あ、人間の男22歳です」

ボケてみた。

「そう、この状態でも余裕ってわけ・・・昨日の大群はあんたの仕業か!？」

あ、モンスター扱い・・・しかも確定でもないのに首筋にある剣を突き立ててきましたよこの人！
殺る気十分っぽいです!!

しかも初めの質問に答えたのにスルーですスルー。

「うわっ!？」

咄嗟^{とっさ}に飛び退いて後ろに下がったけどチクつと微^{かす}かに刺さった所から一筋の血が垂れてます・・・ちよつと痛いです・・・。

「え！赤い!!？」

「・・・」

一定の距離を下がって、大いなる意思に検索をかけてみる。
ヒット、人型のモンスター居ますね・・・
魔物・魔族は血液の色か正体を現した時の瞳で判断、と・・・普通にしたら分からないって事か？

「・・・人間だと言いましたか？」

これ以上何かされない為に距離をとったまま様子を見る。
無論、これ以上されない為の対策として警戒態勢は取りつつ。

「あ・・・、あなたね！さっきのような時に冗談は止めて下さる！
!??お陰であたし人殺しになりかけたじゃないのよ!」

「・・・・・・・・」

「う・・・・・・・・」

私が欲しいのはそんな言葉ではなくて、一言の謝罪。
その意思を込めてケイナを見つめ続けます。

「・・・・すみませんでした、あたしの早とちりで怪我を負わせ申し
訳ありません・・・・」

「はい、許します」

「・・・・あなたねえ・・・・」

瞬殺で許されたのが意外だったのがガクツと崩れて、上目使いで恨
めしそうに睨まれちゃってます。

そして睨むのも飽きたのか剣を鞘に戻して疲れたように歩き出す私
の連れ。

その間に怪我の手当をして、ちよつと警戒しながらも一緒に歩き出
す。

まあ、別にいいんですけどね・・・

私が左手人差し指を首筋に当てただけで即癒えた傷をみてちよつと
目を見開いたものの、今までもそうか・・・みたいな感じで諦めた
ように歩きながらため息してる。

「はあ・・・・・・・・で、あなたホントに何者なの？」

「んゝタツワ才村って知ってるか？」

ビクッ

「お！？・・・知ってるみたいだな・・・」

・・・、知ってるなんて予想外です！

ヤバイです！

事の次第によつては考えた嘘が通りません！！

内心ガクブルしながら様子を伺うと、・・・物凄く後悔して傷付いたような、顔。

あまりに素直に顔に出ていて、正直見てる私の方が辛くなります。

こんな感情、元居た世界ではありませんね。

逆にコレが人の情かと、ちょっと不謹慎にも感心してしまいそうです・・・。

「・・・・・・・・」

「ん？どうしたんだ？」

「・・・そう、あなたあそこの出身なの・・・」

・・・別の意味でヤバイです、何やら思い詰めてますよこの人！でもまあ、ケイナの反応からある程度の事は分かった、と思う。

大いなる意思によると、私がここに降り立つ2週間ぐらい前にリーロン王国の聖地で最高峰のトツゴ山の麓ふもとにあったタツワオ村は山に棲むモンスターの襲撃を受け壊滅したとの事。

たまに起きるこの襲撃、今までは事前に山の恵が急激に減る前触れがあつて、その対処に中央や4大州から増援が送られていたのので何とかなっていた。

が、今回は何かが起きて増援が間に合わなかったかして、その結果が門を管理する村の全滅と周囲に散らばった魔物達・・・と。

おそらくケイナはその増援隊の一員で今まで散らばった魔物達の対処をしていたのだろう・・・。

因みに首都ラーセンからトツゴ山までは道が険しく、距離的にはそれ程でもないものの時間的に遠くて首都から南のファスゴト州を通り抜けその南の辺境州コロツテの西の方・・・最速でも2週間程、ファスゴト州の州都からでも10日はかかる。

連絡手段だけは軍事的・政治的意味もあつて村単位にまで通信施設が整っているので多分、そんな類の話なのだろう・・・。

「まあ気にするな、私にとってあの村は一番近い人里だったという事だ」

「そう・・・、でも知り合いぐらいは居たんでしょう？」

「まあな、・・・でもどちらかというと村からは疎外されてたから別に悲しいとか遅過ぎた対応とかを恨む気はないな」

「・・・ふうん、そうなんだ・・・」

「うん、そう・・・私が住んでいたのは聖地の中だからねえ・・・罰当たりなとかよく言われてたし」

ん、またですよカーン顔。

「・・・口クチ」

「あ・・・はあああああ、あなたですものねえ」

大きなため息と共に吐かれるその言葉。

「その納得の仕方、ちょっと不愉快なんですけど？」

「仕方がないと思いませんか？あなたですから・・・が一番しっくりとするのですから」

「・・・・・・・・」

そのあまりに不条理過ぎる反応に閉口していると、フト何かに気付いたようにケイナがこちらを注視して。

「ちょっと待つて！聖地の中に住んでたって・・・よく生きていられたわね・・・？」

と驚愕の文字を顔に貼り付けた一声。

・・・聖地。

聖地とはよく言ったもので、その実山の頂上から発生する膨大な力によって出現する大量の強力なモンスターに辟易した人間達がそれらを閉じ込める為に作った封鎖地域の事。

山の恵みもいけれど、質量共に他より勝るモンスターの為その中に住む事が出来る人間はほぼ皆無、正規一個小隊規模以下で中に入ろうとするのはある意味自殺行為でもある。

「あ、ああ・・・だからこそその障壁術と結界術。元々は師匠うしながそこに住んでて、弟子として連れてこられなんだがな」

「なるほどねえ・・・」

そうして歩き続けてお昼も過ぎ、そろそろ街が見えてくるかと思いだ始めた時間になった頃だった。

「・・・前から騎馬が一騎」

ふと気付いた私がそう独り言を言ったのだがケイナにも聞こえたらしく私を振り返って、ちよつとすると1km程先の低い丘の向こうから馬に乗った騎士風情がこちらに駆けてくるところだった。

「ん？・・・、・・・あらホント」

道自体は石畳などでの舗装こそされていないものの、そこそこの道幅もあるのでそのまま歩いていたのだが・・・

「げ・・・」

近づいてきて、その騎士風情を見たケイナの珍しい反応。

「・・・知り合い？」

「う・・・知り合い、と言えなくもない・・・かも」

「あ！姫様――っ！！」

歯切れの悪い反応にどうしたものかと思っていると、騎士の方からの多分ケイナを呼ぶ叫び声。

「ふうん・・・姫様ねえ・・・」

「・・・あの、馬鹿っ！」

悪態を吐きつつも足を緩めないケイナに、多分・・・驚く一言を言

つてみる。

「いや、知ってるし」

「!!!・・・何故!？」

やっぱり驚いた・・・多分知らずに名前だけ言っていればバレないとでも思っていたんだろう・・・

その痴態にそこそこ満足してネタをばらす。

「・・・民は敬意を込めて王族の名前を自分の子供に付けない、だからその王族より年上なら同名が存在するけど、年下には居ない」

「・・・そ・そんな・・・じゃあ今まであたしが名乗った者は、全て・・・」

「知ってて普通に付き合ってくれた・・・が大半、と」

ガーン!!

この効果音そのままという顔でビクリされていらっしやるケイナ様。

「さてケイナ、ご機嫌麗しゅう御座いますか?とか言った方がいい?」

「やめてっ気持ち悪い・・・どこでそんな言い回し覚えたのよっ?」

クククツ・・・一生懸命爆笑を堪えながら内心で大爆笑していると馬に乗った騎士が私達の所まで辿り着いた。

「姫様つ、・・・この者は？」

その騎士は何をどう思ったのか私とケイナの間に馬を滑り込ませ、
・ ・ ・ 持っていた槍をこちらに向けて ・ ・ ・ 汚物を見る目で私を見て
いる。

「・・・、不快ですね」

第5話（後書き）

10日に1話ぐらいのペースかなあ・・・話の骨格すら作ってない
完全にその時の思い付きですから（汗

第6話

「もう一度言う、武器を下ろせ・・・不快だ」

「クフト、控えなさい」

「ハッ・・・」

同じ事を口調を変えて繰り返した事で伝わったのだろう、ケイナが命令して騎士が槍を収めた。

「・・・しかし姫様、何故このような誰とも知れぬ下賤の輩と？」

それでも自分が咎められたのが不服なようで。

言うに事欠いて下賤ですか・・・

「クフト、失礼ですよ・・・」

「しかし・・・」

ケイナに止められてなおも上から目線を止めないこのクフトとか言う男・・・

全くもって不愉快だがケイナも持て余しているのかため息を吐いてる。

「はあ・・・ところでカロリアは？」

「はい、彼女は既に終えてファスゴトに向かっております」

「そう・・・」

「・・・じゃあ、そういう事で」

そう言いつつ街に向かって独り歩き出した私。

この二人には仕事があつて、待つてゐる人も居るわけだから私の事は・・・と思つての行動だったんだけど・・・数歩も歩かない内にアッサリとケイナに首根っこを抑えられてグエツとひどい声をあげそうになった。

「ついでだから一緒に行けばいいじゃない？」

そう言つて、クフトが降りた馬に乗り歩かせ始めた王女様。なるほど、しっかりきつかり主従の関係は崩さないつと。

「姫様っ」

クフトはまだ不満なのか異議を申し立て・・・

「いや、ねえ・・・仕事の邪魔じゃないかなあと・・・」

クフトとやらの視線も痛いし私もやんわりと断りを入れる。

「姫様、このような輩と同行など・・・」

無論クフトにも思うところはあつたようで先程よりはマシな発言だったが同行は避けたいと思つてゐるのは明らかだった。

「ん？だつて明らかにあなたより役に立つし？」

そして投下された爆弾。

いや、その爆弾・・・このタイミングだと核弾頭並みですよ？

「な・・・んですと・・・」

「あゝ、ケイナ？」

「それにあたしの事を知ってても対等に居てくれるし？」

あのー・・・漫画風だとクフトにお怒りマークが頭部より巨大に描写されてますけど・・・

わざわざ人間関係を崩すような発言をする困った王女様とその部下のクフトの二人を困ったように見つめているとクフトからの意見・・・
・というか要望・・・。

「・・・分かりました、姫様がそこまでおっしゃるのならソコソコ使える人物なのでしょう・・・ですが小官にも納得させていただける場を設けて頂きたいと存じます」

「はいはい、平たく言えばボコらせるや・・・って事でしょ。全くその口調どうにかならないわけ？あたしはギルドからの依頼を受けたハンターとしてここに居るわけ。場に合った会話してくれないと困るわけよ」

そりゃそうだ、ケイナは王女様・・・政治的にも重要な位置に立つお方であるからして。

そういう方面の輩が色々と画策するのはどこに行っても変わらない世の理というものである。

「ま、確かに・・・部下の失言で上司が窮地に立たされたら目も当

てられない」

「くっ……」

あゝ失敗、不用意な発言でお怒り度数が飛躍的に伸びてしまいました……。

ま、やめる気なんて更々（さらさら）ないんだけどね。

「小官とて状況は選んでおります」

「……周りに人が居ないのは分かってるけど、音を遠くで聞く術が無いわけじゃない」

「そういう事」

ケイナも止める気どころかニヤニヤと私を見ながら煽ってるし。

「……平民如き^{ごと}が知ったような事をつ」

「知ってても出来ない貴族はどうしようもないよね」

チャッ

「キサマ言わせておけば……」

「あらあら……」

我慢の限界を越えたようで装備してる槍を突きつけてくるこのクフトとかいう人。

それに対して面白くなってきた様子のケイナ。

あゝ何気に私もイライラしてたようで・・・さつきから自制しようという気が起きないな・・・

「・・・・・・・・」

突きつけられた槍を見て、少しばかり目を細めてクフトを見ているとやはりというか自制なんて言葉を忘れてるこの人。

ちよつと面白そうだから物理結界を一枚、形や大きさを合わせて適度に穴を開けながらクフトの身体をなぞる様に張って身動きを取れなくし、少し先に行っているケイナの方へ歩き出す。

まるで眼中にないという意思表示して・・・

流石に護衛っばいだけあって型がしっかり、微動だにしなかったのが非常に張りやすかった。

「ケイナさあ、人選はしっかりしないとー」

ガン

「なっ！！？」

私が背を向けた事でプチンといったのか攻撃しようとしたみたいだけど、さつき張った物理結界に阻まれ・・・漸く閉じ込められた事に気付いたようだ。

「はい、アンタの負けー」

「あらら親衛隊の名が泣くわねえ・・・人選はあたしの所為じゃないもの」

「おのれ！この程度の結界・・・」

いやいやこの程度じゃないんだけどね？

普通結界をそんなに細かく加工出来ませんで・・・

しかも対処方法が力の解放による完全な力技・・・出迎えは完璧ですよ。

「あゝムリムリ、空気穴開けてあるからそんな事しても壊れないつて・・・ホントに親衛隊？」

己の持つ力を解放させてもヒビ一つ入らない結界に愕然としているクフトを振り返って冷めた目で見つめる。

「くそっ！」

どうにか結界を破ろうと殆ど身動きできない結界の中でまだもがいているクフト・・・。

「はあゝ・・・クフト、分かったでしょう？・・・ケイ、解いてやってよ・・・」

言われたとおり術を解いてやると、流石に頭が冷えたのかつかつかとこちらに歩いてくる。

しかしまあ、私に対する敵対心・・・いや憎悪かな？は増したようで射殺すように私を睨んでいる。

「・・・確かに、使える人材のようですね。あ、ひめいやケイナはこやこいつも雇うのですか？」

うわ・・・

「はあ~~~~あ」

ここまで酷いと逆にかawaiiそうになってくる・・・

クフトもクフトで自分が仕える姫様にまで深いため息を吐かれて相当・・・いやそれなりにか、凹んでいるようだ・・・。

この事から見るにクフトは選民意識に凝り固まった屑貴族くずではないようだ。

ただ単に多少行き過ぎた選民意識と己のプライドと、育てられた環境で王家に対する絶対的な忠誠がこうさせていると推測してみる。

「クフトは王都から出るのもコレが初めてだから、全部完璧にしないとは言わないけど・・・」

ケイナもケイナでここまで酷いとは思っていなかったらしく、どうしたもんかこの問題児を・・・みたいな感じた。

「はああ、で・・・ケイ、あんたあたしに雇われる気はない？」

「ない」

「うんうん、即答で了承・・・じゃない！？即答で拒否！！？」

まさか拒否、しかも即答されるとは思っていなかったのか頭の上にガーン！の文字が浮かびそうなほど驚いている。

話題の転換を図ったのにこれではケイナも堪こたえるだろう・・・けど。

「おいキサマっ姫様御自らの打診ぞっ！」

「そこはおいテメエ、ケイナが誘ってんのに断んのかっ！が正解だ」

「ぐっ……」

「……はあクフト、いいわ。ケイ、理由を知りたいわね」

理由……んゝ私神だからとは言えないし……

「んゝ特に理由っていう理由はないんだけど、私は権力には迎合しない……故に器を見るし、クフト如きを御せぬケイナに私が使えるとも思えない」

「……そういうのを立派な理由って言うんだけど……」

「如きだと……」

ケイナはケイナで呆れつつ痛い所を突かれたなあって顔だし、クフトは言わずもがな。

「という事で、私は当初の予定通りギルドに行く……そもそも組織は苦手というか嫌いだし登録せねば捕まるのなら出来るだけ自由な方が良い」

「そういう事なら、しょうがないか……もったいないなあゝ掘り出し物見つけたと思ったのに……」

第6話（後書き）

場面場面はこういうシーンいいなあと思うけど（思うだけ）、その間のつながが・・・難しいorz

第7話

それからしばらく、夕方頃に着いたファスゴト・・・。
一番近くの街にと思ってたら州都だった。

流石に州都なだけあって、街を囲む壁の高さも奥行きも、街自体の
広さもそこそこある。

街が大きくなる度^{たび}に街を壁で囲みなおして、新しい壁が出来ると古
い壁を壊して家屋や道になり・・・ほぼ環状になった大きな市場が
2つあった。

ギルドに行くのは翌日にしてぶらりとそんな街ファスゴトを散策し、
ポケットの中でコッソリ作った1エル金貨で夕食を摂り宿に泊まる
事にして、ケイナ達とは宿の前で別れた次の朝・・・
何気に異世界初のまともな居住スペースだった。

しかし朝とはいっても3つの太陽のお陰でこの世界に夜らしい夜は
ないので（白夜が年中みたいないな感じ）変な感覚だが・・・。

「ふあああ・・・さてと・・・」

その内慣れるだろうと思いつつ漸く人心地がついて、これからの事
を考えようとするが逆にこの数日をふり返ってしまった。

「ふう・・・」

ここ数日のとてつもなく波乱万丈すぎる事態に一区切りつき、一人
タメ息なんぞついて・・・

「よいしょつと・・・」

何故かとてつもなく久しぶり感の漂うベッドを惜しみつつ着替えて

部屋を出る。

昨日散歩したとはいっても手頃そうな宿だったココとギルドまでの道、その周辺だけ。

さてどうするかなあと思いながら宿の1階にある朝昼は定食屋、夜は居酒屋なその名も「宿の1階」に入る。

私的にはこの名前を付けた人に何かしらしてあげたいと思うほど名前と店がピッタリだった。

宿の名前も一緒なので主人に聞いたら元はこの店だけをやってて、上の宿は別の人がやってたのを宿が廃業した時に買い取ったらしい。宿の方は娘夫婦に任せているそう。

既に店は開いていて宿の主人が朝メニューを客に給仕している。

「お、おはようさん。飯食べていくかい？」

私がこの宿を選んだ理由は手頃な価格と家族経営による親しみやすさ、それにここら辺では珍しい朝食込みの宿泊プランだった事。

「ん、運んでくれ」

「あいよ、おーい朝定一丁っ！」

「まいどーっ」

主人の奥さん・・・女将さんが奥のキッチンで作っているようだ。15席しかない店内の空いた席に座って朝食を待つ。

今は8時でこの世界風に言うと鐘1つ時、朝の8時から4時間事に1日6回鐘が鳴る。

「へい、朝定おまちっ」

ボーっとしてる内に出来上がったようで目の前のテーブルにサラダ、ベーコンエッグらしきもの、ちよつと固そうだけど大きさはちょうどいいパンが2つにコーヒーっぽい湯気の出てる飲み物が載った盆が載せられる。

「ん、旨そうだ・・・」

「おう、旨いぞ。コーヒーはおかわり自由だからあそこで好きなだけ淹れてくれ」

「おまえさーん、朝定2つあがったよー」

「おう！じゃあな、何かあったら呼んでくれ」

やっぱり朝時、忙しいらしくさらっと会話して他の客の料理を取りに行ってしまった。

「ん、確かに旨い・・・」

一人食べながら店内を見てみると、どうやらテイクアウトもしているようで他の客や外から来た人が何か包みを持って出て行くのを何人が見た。

「ふう、ごちそうさん」

私にはちよつどいい量の朝食を食べ終わって、そのまま食後のコーヒーと洒落^{しゃれ}込んでいたらフト気付いた。

「あ、コーヒーは一緒なんだ・・・」

そのまま暫く・・・店には悪いのを承知で居座って主人が空くのを待った。

「主人、ちよつといいかな？」

「あいよ、何か用かい？」

まあ、やはりというかこの世界の朝は早いようで、私は最後の方だったので主人が空いたのはコーヒを1杯おかわりして飲み干した頃だったが。

「ん、ギルドに行きたいんだけどまだ開くまで時間あるだろ？だから暇潰せる所はないかなって」

「あん？おまえさんギルドに何の用があつて？ああ、依頼しに行くのか？」

旅の服装はしてるが荷物が無いので近くの村から依頼しに来た人と思われてるようだ。

「・・・ああ、登録しに行くんだ」

「登録！？お客さんこう言っちゃなんだがそんな風には見えねえなあ・・・武器も持ってないみたいだし・・・」

そう言つて不躰ぶしつけにならない程度に私の事を上から下まで見る主人。言われてこの世界の常識、武器も持たずに旅するのは自殺行為を思い出した。

「そうだな、武器屋の場所を聞こうか」

「・・・武器屋ならこの通りを城の方へ行けば通り沿いにあるけど・・・あんた大丈夫かい？」

「ああ、法定登録しに行くぐらいだからそこそこやれるだろう？」

予想通りというか・・・この世界の人から見ると荒事の全く出来なさそうな外見で心配された。

「っ！！！ホントかい！？そんな風には見えねえけどなあ・・・おっと、失礼」

「言われ慣れてるからイイよ・・・そのお陰でココまで来れたし、この外見で得をする事もあるからね」

苦笑しつつそう返し、主人が納得するのを待つ。

「なるほど、しかしまあ・・・姫さんといいお前さんといい似合わねえ人が法定登録とはねえ・・・」

ちよつと待て！

何故そこでケイナの事が出てくるっ！

「・・・姫さんって・・・？」

「ああ、知らねえのか？我らが第2王女ケイナ姫様はウチの常連なんだ。昨日もココに泊まっていったんだがなあ・・・見なかったのかい？」

「・・・、常連かよっ！！」

しかも昨日も泊まっていた!!?

「・・・マジ？」

「おう、マジよつ。姫さんわざわざココまで来て登録していったんだぜ？なんでも王都でやると色々煩わづらいとかで・・・そんな時にウチに泊まって、それ以来の常連さんだ」

主人にとってそれはとても誇らしい事なのだろう、微かに頬が色づいている。

「おまえさーん、いつまでも油売ってないで片付け手伝ってよつ」

「おつといけねえ、じゃあおまえさんも頑張つてな」

手をヒラヒラさせて主人を見送り私も席を立つ。

ケイナがココの常連だったのは意外を通り越して驚きだったがそこまでの事。

主人と女将さんに挨拶をして宿を出て、さっき聞いた武器屋を目指す。

言われた武器屋はすぐに分かった。

なんせ店先に高さ3m程の剣のモニュメントがあったから。

店の脇から奥へと続く小道があつて、奥からはトンカンと槌の音が響いてる事からして工房で作られた物売っているのだろう・・・入ってみて驚く。

まだ開店間もないようで他の客は居なかったが、入ってすぐのところに一振りの日本刀が立てかけてあったからだ。

でも見た目はそこまで日本刀じゃなくて、少し細身な上に鞘にもグ

リップのような物が巻かれ柄と鞘がくつつきそうな機構もあった。でもそれは店内を見渡す限り他に刀と呼ばれる物はなくて片手剣や両手剣、槍やメイスなどだったので店内でポツンと浮き異質すぎる代物だった。

「うお!？」

値札を見たらもう一度驚いた。

「この剣を持ち上げて鞘から抜けた方に差し上げます」だし。

「らっしゃい、あんたも試してみるかい？」

店の主人が声をかけてきたが私はそれどころじゃない……。

文字が書いてある値札の下の方に「使え!」と私の世界の言語で書いてあったから。

「主人……いや、おやつさんだな。この刀と値札おやつさんが？」

「あん? ああ違うぜ……これと値札は置かせてくれと頼んできた変な旅の人が置いてったんだ」

怪し過ぎる……

「その客は、変な人でなあ……店に来て剣を見てるのかと思っただけの客が居なくなっただ途端に話しかけてきてな、10エルやるからコレを置いてくれていきなり頼んできやがったわけよ」

「……因みにいつ頃の話？」

「んー10日ぐらい前だったかなあ？」

あははははは・・・あの野郎だ。
その後も疑われない程度に人相やら聞いてみるとあの野郎以外ありえないって程だった。

「これな、武器だつて事は聞いたんだが・・・俺にやあ分かんねえんだけどなんか惹かれてな」

流石工房の親方、職人氣質な風貌通り良し悪し^あを見る目を持っているのだろっ・・・

「んじゃ、試してみますか」

持てて抜けると分かつてて、でもそれじゃあ面白くないって事で知らない振りを決め込む。

イン

すんなりと持てた事にまず驚いた振りをして、おやつさんは目をまん丸にしてるけど・・・

抜いてみると、ああ・・・いい刀だった。

そうとしか言えないほど、いい刀だった・・・音も良いし。そして使い方も頭に入ってくる。

「おおおお！！抜きやがった・・・」

「ん、抜けちゃった、ねえ・・・まさかのビックリ・・・」

知らない振り知らない振り・・・

「抜けたんなら、それはお前さんのもんだからな好きに使うといい」
やっぱり職人なのか、変に金よこせとかそういった事は一切なくす
んなりと所有権を渡してくる。

それに甘えるべきなのだろうが・・・ちよつと、あの野郎の差し金
だつて事が気に入らない。

「いいのかなあ・・・こないいい刀・・・」

「あゝちよつと見させてもらつてもいいか？いやね、気にはなつて
たんだ」

すんなり渡してくれたおやつさんもこの刀には興味津々だったよう
で、見せてくれと手を差し出してくるが・・・それは出来ない。

「おやつさん、私が持つてるからその間見てくれ・・・手渡した途
端肩外されちゃ困るんだろ？」

この刀は使う人を選ぶ・・・つまり私しか使えない。

刀も鞘も、私が触れていなければ1mmも動かせない・・・

そして鞘にもグリップが巻かれていて、刀の柄に付けて回すと固定
されて長巻になる。

長巻とは太刀の派生形で柄の部分がとても長く薙刀と少し似ている
武器だ。

柄がとても長いだけで、使い方は普通の刀と一緒に・・・ただリーチ
が伸びるだけだ。

だけど予想通りというか・・・力を込めれば込める程切れ味が上が
る所に異世界ぶりが発揮されている。

「ほう・・・えらく斬れそうだが、こんな細くちゃすぐに折れちま

うな・・・」

「いや、この刀は私の故国の古代武器でな、馬鹿な使い方をしない限りそうそう折れないしなやかさを持つている、肉や骨を斬る事に特化された武器だし・・・達人が使えば剣も斬れる」

「ほおお、おまえさんの国の武器か・・・それに剣も斬れるってそりゃいくらなんでも・・・」

「達人が使えば、だ」

興味深そうに色んな角度から刀を見てたおやつさんだが満足したのか鞘に戻していいと言ってきたので戻し、腰に佩^はく。

「お、まいどっ」

他の客が来た事も一因だったのだろう。

「スローインダガーが欲しいのだが・・・」

「あいよ、それだったらこっちの棚だ」

おやつさんは今来た客の接客に行ったし、私もここに留まる理由がないのでおやつさんが気付くように手を振って店を出る。

おやつさんはまだ技術的未練があったようだが、ギルドもそろそろ開く時間だ・・・お暇させていただこう・・・

第8話

店を出て、ギルドへ歩き出して暫くした時にフト気付いた。

「服と武器が合わないな・・・」

気付く元となったのが他の通行人で、すれ違う人すれ違う人がみんな変な目で私を見ていたからだっただけ・・・

仕方がないので人気がない所を探して寄り道をする。

すいすいと狭い路地を選んで歩き、ちょうどいいスペースを見つけて服装を変える。

「コレでよしと」

今度は中世ヨーロッパの軍服をデフォルメしたもので、その上に日本の羽織をこれまた加工したものを合わせた。

羽織を伸ばして風を孕む様^{はら}がちよっとお気に入り。

色は黒と赤を基調として、服装と刀を合わせて全体的に見ても違和感はない感じ。

まあ、この世界の人から見るとちよっと粋^{いき}がった新進気鋭のハンター・・・っぽいかな？と思う。

その服に満足して、来た道を戻る。

「・・・ん？」

戻ろうとしたのだが・・・

というありがちなパターンをちよっと期待してみたんだけど・・・
なあ・・・

「何事もなく・・・か・・・」

普通に人と会う事もなくさっきの通りへ出てきてしまっただけとつまらない。

今度は変な目で見られる事はなく、というか皆が避けて通るので別の意味で見られているのかもしれないが・・・。

「まあ、いいか」

そのまま放置してギルドに着いた時にちよつと納得した。

自分でも粹がった新進気鋭のハンターっぽいとかناとは思ってたけど、予想通りに近かったようでプライド高そうな人達しかそう思った見た目は居なかった。

大体は小汚いいかにもと言った感じの人や見た目に拘らない実力主義っぽい人達。

それに納得して中に入ると・・・まあ皆さんが皆さん綺麗な統一意識で私の事を見て、品定めをしていく。

それこそ実力主義っぽい人達も使えるかどうか最低限の見極めしてるっぽいし。

そのままそういった人達を無視してカウンターに近づき、そこに居た二十歳ぐらいの女性従業員に声をかける。

「あのー」

「あ、ようこそ国営ギルドへ・・・、・・・・・・オーダーですか？ エントリーですか？・・・オフアーでしょうか？」

彼女の的には苦渋の回答だったらしく、書類を書いて見てなかった自分を悔やんでそうだ・・・。

彼女の頭があがってパツと私を見て、知らない顔　この地方に居る

ギルドメンバーじゃない？　じゃあ登録者？　服装や装備から見てありえない　まさかの依頼者？・・・と考えたのがよく分かる。

「・・・あー、エントリーだ」

周りに居た他のメンバー達も似たような考えだったのだろう・・・

「ぶはっエントリーかよっ！」

とか・・・

「見た目から入りすぎっ！」

とか・・・

「おいおいおい・・・」

みたいな声がココまで聞こえてるよ・・・

「あ・・・はい、エントリーですね・・・ではこちらの用紙に記入をお願いします」

そう言っただけ渡された1枚の紙。

よく見ると初心者もコレで安心みたいな親切文面、なわけもなく。

「これって、名前とか住所とか書きなくなったり無くなったりしたらどうするの？」

「基本的にきつちりとお願ひします」

「私の住所は2週間程前に無くなっただんですけど・・・」

「っ！！！！で・・・では今住んでいる所を・・・」

「宿？」

「あゝあゝ・・・そうですね・・・すみません・・・えーと・・・」

「

ん、かなーりテンパっていらっしやる。

ホントこの人は顔に出て分かりやすい・・・。

今もあーこの人あそこ出身なのねーとかいけない事聞いちゃったーとかああそんな事気付けよ私とかちゃんと答えないとーって考えてるのがよく分かる。

逆に私はこれでやっていけるのかと心配してしまいそうだ・・・。

「後から変更が出来るのなら白紙で・・・それと名前ってフルネームじゃないとダメ？」

「あーうー・・・変更は営業時間内か更新の時にも出来ますのでもう白紙でいいです、名前は先程も言ったように基本的にきっちりで・・・」

「基本的につて事は・・・ん、コレでいいわけだ、職業は・・・結界術師、ハンター希望と・・・あれ？」

ちよつと悪戯心で追いついたすように会話して、読みながら聞きながら記入してたんだけど、ちよつと失敗したかもしれない。

用紙の上半分が書き込んで提出する所、下半分は上と同じ番号が書かれた控えみたいな物でどうやらそれを持ってランク判定とかギル

ドメンバー証明カードとの引換券にするみたいだけど・・・調べる事とかが全部Eランクになってる・・・。

「あゝもしかしてだけど・・・これって初心者用の用紙？」

私は法定登録をしに、ココに来てるわけだからほぼ確実にランク判定しなければいけないんだと思う。

「はい？そうですよ、・・・・・・・・あつ！・・・・もしかして・・・」

「うん、もしかしくても法定登録に来ただけど」

とそこで、まだ聞き耳をたててたっぽい奴や聞こえてしまった奴が驚いて仲間らしき人に話してるのが視界の隅に入ってしまった。

「おい、あいつ法登（法定登録の略）らしいぞ」

「・・・・マジで！？あいつが？」

「やっぱりなあゝ俺はそう思ってたんだ」

とか・・・・何もしなくてもギルド中に広まるって・・・

「あ、すみません、そうでしたか・・・・（そうならそうといってよっ！）」

受付の女性はこれまた分かりやすい顔で法定登録用の用紙を出し、私との会話が面倒になったのか自分で書き写し始めた。

「・・・・、名前はケイ・・・・はい、コレ渡しておくわね。それじゃ

あそこのドアから入って、居る人間にその紙の項目埋めてもらってください。」

渡してもらった紙を持って言われたドアの方に歩いていると・・・どうやらココではお約束を体験出来るらしい。

妙にニヤニヤした、法定登録がギルド中に広まった後ギルドに来た3人組がそのドアの前で私を見ている。

わざわざドアの近くに陣取って、退かさないと中に入れない。

他の人間も、今から起こる事に何かしらの期待を抱いているようで・・・見てないふつを装いながらこちらに注意を払っている。

受付の女まで・・・今まで女性って言うてたけど、この行為でただの女呼ばわり決定。

その中を私はドアに向かって歩き・・・

「・・・そこ、ジャマ」

逆に挑発してみる。

「ああん？ 賤しつぽのなつてねえガキだなあ、先輩に向かってなんだその口の聞き方はあ？」

「あはは、その後輩を苛めるなよ、泣いちゃうじゃないか」

「がははは、ちげえねえ」

ん、予想通りの反応。

逆に予想通り過ぎてあまり面白くない・・・というか、元世界の旧日本人が年齢より若く見えるのはこの異世界でも同じらしい・・・ケイナもそんな感じだったし。

「はああああ……どこにでも居るんだなあ……いついつどうしようもない人間は……」

「んだとガキがつ！」

「ん？苛められたいガキだったのか……」

「身包み剥がされてえんじゃねえ？」

三者三様に一言言って戦闘態勢に入るこの人達。

予定調和ながらも乱闘になるのかとニヤニヤしてたり面白そうにこちらを見ている他の人。

ギルドの受付嬢はまたか的な雰囲気で一瞥をくれた後自分の書類仕事に戻っている。

「さてと、今からお兄さん達が世間を知らないお子様に躑躅してやるから、大人しく躑躅けられる？」

と言いながら右フックで殴りかかってきた真ん中の……便宜的にクズA。

それに対応するように左ミドルキックの体制になる向かって右側のクズB。

多分、殴られて右側に吹っ飛んだ所を蹴ってクズCの方へまた吹き飛ばし……クズCが待ち構えていると言った寸法だろう……

ガッツ！

大人しく殴られてみたが、ただ普通に殴られるような事は痛いからするわけもなく。

「っ！痛えっ！」

皮膚表面ギリギリに障壁を張って微動だにせずに防ぐ。
吹っ飛んできた所を狙って放つつもりであったろうクズBの左ミドルキックは繰り出せぬまま構えただけに終わり、クズCは微妙にたたらを踏んでいる。

「・・・で？」

そして私は、そのまま一切動かさず動かされずそこに立っているわけ。

「こ、この糞ガキがあっ！」

クズAは痛めた右手をかばったのか今度は左ストレート。

ガッ！ポキッ

無論、先程と同じ結果になる。
ハズだったんだけど・・・

「ぐわっ！・・・お・折れっ！？」

それじゃあ面白くないからって障壁の面を加工して人差し指から小指まで4本折ってみました。

「おい！？てめえっ！！」

「このやろっつー！！」

指の折れたクズAを目の当たりにしてクズBが蹴りかかってクズCが殴りかってくる。

ギルドの中、規定で武器の所持は認められているけど使用は禁じている。

入り口真正面の壁にデカデカと武器・攻性術を使ったら即免停、相手の状態によつては即取り消し&捕縛と書いてあった。

このクズ達のような血の気の多過ぎる輩がソコソコ居るからの対処だろう。

だからこのクズABCは徒手だし、私も防御術しか使っていない。そうしてる間にクズBとCも障壁に骨を折られ、痛みに悶えつつ私から距離をとってきた。

「・・・物理障壁を殴ったぐらいで骨折れるなんて・・・弱いねあんた達」

「くそっ・・・おい受付のねーちゃんっ、こいつ絶対攻性術使ったぞっ!」

痛みに耐えつつそんな事をのたまったクズA。

「いいえー、ギルド内で攻性術が発動されればアレが点いて鳴るのはご存知でしょう?」

聞くに堪えない負け惜しみをそうやってある一点を指差しながら一蹴する受付嬢。

アレ、と受付嬢に指差された物を見てみると・・・受付から見やすい柱にくくりつけられた台に載った一本の火の点いてない蠟燭ろうそく?

「術加工された蠟燭か・・・」

多分、攻性術の術波動を検知して発動するタイプなのだろう・・・
そこから視線をクス共に戻し、さらに挑発。

「・・・さて、まだやるのか？クスABC・・・？」

「・・・この糞がキツ、ぶっころすっ！！！」

頭のネジが何本か飛んでいつてしまったのか・・・左手の指を折られたクスAがキレて、佩いていたグラディウスっぽい剣を抜いて斬りかかってきた。

「あ、免停・・・」

「う・・・」

ボソッと独り言を言ったんだけどクスAにも聞こえたようで、振りかぶった所で動きが止まった。

なんかかわいそうになってきた・・・

「はああ、あんた達・・・折れたところ見せな」

そう言つて半ば無理やり折れたところをつかんで抵抗出来ないようにして治療術をかける。

「・・・終わり、次・・・次・・・よし、まだくっついたばかりだ。3日ぐらいはあまり動かさず大人しくしている？」

「あ・・・ああ、分かった・・・すまん」

「あゝ・・・すまなかった・・・」

「す・すまんなあ・・・」

ほぼ無理やり捕まえ、痛みで押さえつけながら治癒術をかけたのに素直に謝ってくるクズABCを少しばかり訝^{いぶか}しげに見て・・・ああと合点がいった。

治癒術を扱える人材、それはどこの国でも貴重な存在だ。

医術の発達している国でも、やはり需要は尽きない為にそれなりの処遇を受けている。

扱える人材の乏しい国ではそれこそ貴族並の待遇を受ける事もあるのだ。

それに戦闘中など、その場で傷を癒せるのは治癒術を使える人だけ。よく使われる薬ではどんなに良い物でもせいぜい鎮痛剤か止血程度、術薬なら骨折も治せるだろうがとても高価。

術が使えるかどうかは術資質の量などには限らず、完全に素質に支配されているから少ない。

その事をほぼ一番良く知ってる「ギルド」のメンバー、だからこそその反応だろう・・・。

ケイナも私の首筋の傷を治した時に目を見開いて驚いてたし。

「ん、じゃ退いてくれる？」

お約束を味わってみた私は普通とは違う自己流のお約束の終わり方に満足して、ドアを開けた。

第8話（後書き）

あけましておめでとございます。
年、明けての初投稿です。

第9話

「・・・えつと・・・」

ドアを開けた私に何とも殺風景な部屋の様子が飛び込んできて、ちよつと戸惑う。

もつとこう、何かしら装飾があっても良いんじゃないかと思うわけよ。

国営のギルドなんだから王様からの感謝状とか色々・・・

「ようこそ国営ギルドへ、早速だけどそこに座って・・・ええと、ケイさんね」

6畳程の部屋に机と対面に椅子が一客ずつ。

机の上には何かの書類が数枚あって、私が入ってきたドアに向かって座りその書類を見ている・・・見た目むさいオッサン。

オッサンの後ろには窓が1つ。

左側の壁面にはもう1つドアがあり、そこからあの受付嬢が居た力ウンターを経由して奥の事務所に繋がっているのだろう。

他に私の目に入ってくるのは木の壁と天井と床、部屋の情報はそれだけだった。

何も言いようがないので無言のまま言われた通り残っている椅子に座ると、驚いた事に机の上の書類が淡く発光して緩やかだがしつかりとした文字が書かれていった。

「おお」

まるで光の精霊がダンスをしている様な情景に感心しているとそんな私をチラリと見上げたむさいオッサンから一言。

「・・・ラクでしょ？道具だから嘘つけないし、初めて見る人は大體驚くんだよねえ」

見た目はアレなのに喋る表情には知性というか・・・肉体派っぽいのに皮肉っぽい頭脳派のようなというか・・・

「・・・と、え？・・・」

どという構造でどうやってるのかなあ？と思いつつも暫くすると光が収まって、書かれた文面を読み始めたオッサンの顔色がスー・・・っと、擬音が聞こえてきそうな程変わっていくのを静かな気持ちで見つめる。

やはりと言うか・・・だつてわかりきつた事だし？

Zランク所持者の少ないこの世界、まさか自分がこの場に立ち会うなんて殆どの人間は考えてもいない事だろう。

「・・・あー、・・・えつと、・・・すまんが、王都の国営ギルド庁本部に行つて、もらえませんか」

それでもギルド支部の人間、醜態は晒したくないのか表面上は平静を保とうとする節が垣間見えた。

「何故、と聞いても？」

分かつてる事だけど、知らない振りしないといけないのがなあ・・・

「・・・この検査装置が正しければあんた、いやあなたはZランク、です。・・・おそらく、おそらくですが神器を扱えるのでしょうか？」

「・・・神器？」

「あゝあなた個人にしか具現しないし扱えない装備の事ですが、固有装備や神からの贈り物とも呼ばれます」

「ああこれの事ですか？」

そういつて、初日に考えた固有装備・・・神器を、片方だけ具現化する。

何気に言葉遣いが変わっているのに気付くがあえて気付いてない振りをする。

というか今更すぎてツツコミ入れる気にもならない。

第一、ここまできてもなおこのむさいオッサンの名前すら知らないで、神器。

声に出さずに心の中で開放と念じ、具現化されていく様を期待の文字を顔に貼り付けたむさいオッサンと共に見つめた。

その開放の念は腕の周りを淡い光で包み込み、その光が集中しているってガントレットの形態、剣も収納したままの状態で具現化された。

「そうそれ・・・Zランク確定ですね。って神器か・・・見るのは初めて、いや驚いた。っと、失礼・・・Zランクの認定と登録は王都の本部のみですから、本部に行ってくださいという事です」

「なるほど・・・」

一つ首肯を返しながら神器を指輪に戻す。

それを名残惜しそうに見ながらこのオッサンが話の続きを話し始めた。

「それと、この紙を持って受付に渡してください、仮ですがギルド

証＋S＋ランクが支給されます」

そう言いながら書類の2枚目を一部分切って渡してくる。

「そのギルド証は仮ですので王都のみで有効ですが、正規の物は身分証明及び国内全ての通行証となりますので失くさないように、お願いします」

了解の意思を告げその紙を受け取り立ち上がって、退室しようとドアに向かったところで声をかけられた。

「あ！そうそう、王都に行きながら1つ仕事をしていきませんか？」

「・・・は？」

突然の話に振り返り、むさいオッサンの顔を見つめると私が興味を持ったと勘違いしたのかその続きを話し始めた。

その顔はいい事を思いついたと言わんばかり。

「いや実はね、今朝早くに入った依頼なんですあいにくが生憎とメンバーが出払ってて困っていたんですよ」

「・・・」

黙って聞いているとそのまま続きを喋りだすむさいオッサン。

「任務ランクはB＋。任務内容はちょうど明日王都に向かう商団の護衛、報酬は準備金として5エルと成功報酬として45エルの合計50エル。どうです？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まだ黙っていると何を思ったのかその任務の背景なんて語りだして・
・まだあんたの名前も役職も知らないんだけどねえ・・・。

「ちょっと前からなんですけどね、ココから王都に向かう街道沿いの山に賊が陣を構えたらしくて・・王都にはこちらの余剰戦力がない事と合わせて討伐要請を出したんですけどそれっきりまるで音沙汰がない・・支部としてもメンバーを派遣したいのですが最近のアレで今の現状を維持する事で手一杯なんですよ。仕方なく商団の護衛を斡旋して対応している現状でして・・受けてもらえませんか？」

「そしてZランクだと思われるから、あわよくば討伐してしまうだろう・・と？」

外見はともかくとして、あの喋り方からこのオッサンの思惑を推測して言ってみただけど・・・

「・・・・・・・・いやああははは。」

凶星だったらしい。

冷や汗ダラダラとまではいかないものの、それなりに凶星を突かれるとは思っていなかったらしく慌てている。

喋り方が知性的だったのは仕事上のスキル、という事が・・・。

「・・・・そもそも、予想はつきますけどあなたが何者かも知らないのにそんな話をマトモに受けると思います？」

「あ・・・・そうでしたね、大変失礼しました。私はこの国営ギルド、

ファスゴト支部の支部長マツコイ・アルフォマと申します」

さらに慌てて自己紹介してくれたマツコイさんだったが、フト気付くと横の壁を見てため息をつく私の横顔を期待するような目で見て
いる。

「・・・で、受けてくれませんか？と？」

「出来れば、是非に」

「・・・はあ」

もう一度ため息をつきつつ考えてみる。

まず、護衛の仕事は何事もなかったかの様にすんなりと終わるだろう。
う。

というか、すんなりといかなかったらそれはそれで問題。

それと、別にがめついわけではないが報酬は討伐も含めると明らかに少ない。

ここは今から交渉しないと怪しまれるかもしれない。

今の私は田舎から出てきたばかり、ギルドメンバーにもなったばかりだ。

田舎者だといえ私のギルドランクから推測できる強さで多少の金
は持っているだろうし、そうなると相場というものもある程度理解
しているって事に行き着く。

もし怪しまれなかったとしても、どれだけ田舎者なんだと侮られて
しまうだろう。

それに本部からの音沙汰がない事から考えても、ある程度戦力を整
えたい・・・それほど梃子摺る相手である可能性が高い。

まあ、護衛任務が何事もなく終わって賊と出会わなければ討伐のし
ようがないか・・・。

だとするのなら、討伐依頼の方はもし遭遇し成功したらの事後依頼受諾にしてもらわないと。

「・・・伺いたいのですか？」

「はい、なんでしょう？」

「賊の討伐はやった後からでも報酬は貰えますか？」

「ああ、はい。その場合は証明出来る物を持参して頂くという事になります」

「証明できる物、ですか・・・」

「証明できる物・・・として一番に思いついてしまったのが生首とグロイ物だった。

そんな物だったら正直やりたくない。

そう思ったのが顔に出たのかどうなのか・・・

「・・・別に身体の一部を持って来いとは言いません、A＋ランクからの高ランクギルド証には記録機能が付いています。記録開始時に登録された名前や通り名を声に出して頂ければ記録を開始し、終了時には記録停止と言って頂ければ停止します」

「・・・なるほど、じゃあ＋S＋の私のも？」

「はい、仮ギルド証ですがそれはあくまでZランク認定を貰い登録されるまでの仮という意味で実際には＋S＋ランクとして認定登録されています。先程申した王都までの通行証という限定以外は正規の＋S＋ランクギルド証に則^{のっと}った物になります」

「なるほど、A＋ランク以上のメンバーは依頼を受ける、現地に赴おもむき依頼を遂行しギルド証にその記録を記録する、帰ってきてその記録を見せてから報酬を受け取ると」

「はい、その様な流れになっております」

「・・・一定の理解を私が示した事で期待が膨らんだのか、先程よりも期待のこもった笑顔で答えられてしまった。

「・・・では、」

「はい」

相槌あいづちはやっ

「・・・、護衛中に遭遇して討伐し記録したとする、その後王都で賊討伐の依頼を受けてそのまま記録を見せ護衛の報酬とは別に討伐依頼の報酬を貰う・・・という事であればその依頼、受けましょう？」

ちよつとだけ、私を騙そうなんて無謀ですよ的な顔をしながら答えたらマツコイさん、しまったと言わんばかりの顔で弁明を始めた。

「あ、すみません・・・先程のお話は護衛報酬のみで討伐もさせてしまおうというわけではなかったんですよ、討伐の方は護衛とは別に依頼が出されていますので、ご安心下さい」

「そついう事にしておきましょうか」

捨て台詞的にそう呟いてその飾りの一切ない部屋を出た。

第9話（後書き）

少し空いてしまいました・・・ちょっと前に10日ぐらいに1話ペ
ースですねなんてココに書いてたのに^^；

第10話

マツコイさんから受け取った紙を持って受付に戻った。
周りの色々な意味を内包した視線は悉く無視の方向で。

「・・・あのー」

この受付嬢、また下向いて書類仕事してて私が目の前まで来てるのに気付きもしない。

もしかして、話しかけてくるまで自分からは何もしいなんてポリシーを持ってるんじゃないかと勝手に想像してしまうような無視っぷりだ。

「あ、はい・・・ケイさんでしたね。では先程支部長から貰った用紙をください」

チラツと視線だけを上げて私を確認して、何もなかったかの様な無機質な声で喋るこの受付嬢・・・

「はい、コレね・・・」

客商売ですからそれはいかななものか・・・と思いつつ、まあ国営だからお役所仕事かと納得して用紙を渡す。

・・・ちよつとだけ、読んだ後の反応を期待しながら。

「はい、えーと・・・。・・・ええつと・・・。・・・、・・・。・・・」

用紙を受け取ってそれを見たまま、固まってしまいましたよこの受

付嬢……。

「それと支部長からの提案で明日出発する商団の護衛の依頼、受ける事になったんでその辺りの説明もお願いします」

追い討ち、かけてみました。

「……………」

まだ固まってるのか、無視です無視。

ふと気付くとギルド内で屯たむろしてた、多分今日の仕事にあぶれた先程の事を知ってる人達も私と受付嬢の事が気になるようで……、注目浴びてます……

今まで私の人生においてこの種類の注目をココまで浴びる事は皆無だったのでちよっと、困りますね。

「……あのー」

出来れば早く終わらせたいんですけど……？

「……あ！も、申し訳ありません！！ただいま処理させて頂きます！ー」

立ち上がったの腰から90度、最敬礼ですか……。

さっきまでの態度はなんだ？と言いたくなる程頑張ってる額に汗かきながら作業する受付嬢。

その態度を不審に思ったのか先程お約束を演じてくれた三人組のリーダーっぽい人が近づいてきた。

「なあ、あんた……我らがファスゴト支部のアイドル、コーヒー

リアちゃんに何したんだ？」

「ん？検査の用紙を渡したただけだが？」

「それでコーフイリアちゃんがこうなるわけねえだろ？事の次第によっちゃ支部のメンバーが敵に回るぞ？」

その言葉に首肯しながら周りに近づいてくる静観してた人達。

怒気・殺気・・・嫉妬やら色んなものが私に向かってます・・・ね。あんたらもう少しマシなもんに興味持てと言いたい、というかツツコミ入りたい。

「ちよちよつと、止めなさい！・・・嫌いになるわよ？」

そして一生懸命作業してた受付嬢、気付いて止めてくれたのは良いけどその言葉もいかなものか・・・何気に瞳ウルウル上目遣いで明らかに狙ってやってるでしょ。

しかもそれに怖気おじけづいたのか口をつぐんで私から一步遠のく一同・・・。

「・・・・・・・・」

ここつて、国营のギルドなんだよな・・・

もしかして、この世界を作ったのは萌えもー好きな二次元愛好家なのだろうか・・・

このテンションにはとてもじゃないけどついていけない・・・
変な勘繰りをしていたら・・・、書いていた書類をカウンターの穴に入れたコーフイリアちゃんが隣の台に染み出すように出てきた腕輪を取って私に視線を合わせてきた。
その機構にまた少し驚く。

「お待たせしました、登録完了です。これがギルド証になります」

どんなご都合主義の世界なんだと現実逃避気味に視線を彷徨^{さまよ}わせていたら終わったようで、コーフイリアちゃんがプレート^{プレート}の付いた腕輪を差し出してきた。

周りの痴態は放置して、腕輪を見るとプレートの部分にギルドのマーク・ランク等書^{など}かれていて・・・いや彫^うられていると言った方が正解か。

「お・・・」

早速^{さっそく}、手首に通してみたら勝手に腕の太さに合わせて大きさを変えた事にまた驚く。

腕を振ってみても何も付いていないかの様な感覚で全く違和感がない。

「・・・それと、明日の依頼受諾の件ですね」

顔には出さなかったが、ちゃんと聞いてたんだ・・・

腕を振ったりしつつギルド証の感覚を確かめている私をチラリと一瞥しつつ次の件に移るコーフイリア嬢・・・普段はとぼけてるけど実は仕事デキる人間、として呼び方を変えようかな。

「ええ」

「はい、ではまず依頼を受ける方法ですが、2種類あります。1つはギルドに来ていただきそのギルド証のプレート部分をあそこに3つ並べてある台にかざします。そうされますとその時のご自分のランクで受諾できる依頼がランクの近い順にて表示されますのでそれ

を指示に従って受諾していただく方法。もう1つは直接私など受付の人間に聞く方法で、前者は通常利用していただく事になるかと思いますが後者の場合は特定の条件がある場合に利用される事が多いです」

「・・・特定の条件というത്？」

「はい、例えば依頼の種類や地域・依頼ランクなどを限定される場合です」

「なるほど・・・」

私が一定の理解を示した事を感じ取ってニツコリと微笑むコーヒー嬢。

ただ惜しむらくは初対面の時との態度の明らかな変化が。私にとってその変わり身は数日前までの人間だった頃を思い出してあまり面白くない。

しかしこの世界の人にとって微笑んだコーヒー嬢はとても可愛いらしく、ギルド内に居た他の奴等からの魂を抜かれた溜息やらがあちこちで耳に入って正直耳障りだ。

「では明日の護衛任務についてですが」

「あ、はい・・・」

コーヒー嬢・・・、周りの醜態は完全スルーですか・・・

「今回護衛する商隊の規模はそれ程大きくはありません、護衛対象は3人の人と2頭の馬、大型馬車1台との事です。その他詳細についてはこちらの依頼者側と詰めて頂きます」

説明を受けて手渡された1枚の紙、見ると何処かの住所・・・という私が泊まった宿「宿の1階」と依頼者の名前が書いてあった。なるほど依頼者はそこに居る、詳しい事は依頼者に・・・と。

「それじゃ、行ってみます」

「はい、お氣をつけて・・・いつてらっしゃい」

・・・なるほど、少しだけ周りの輩の気持ちが分かった気がする。そこにあるのは一言で言えば、『天使の微笑み』と言われてしまう様な笑みがそこにはあった。

「さてと・・・」

阿鼻叫喚の図、・・・と言った方が良いのか大騒ぎのギルドを後にして昨日泊まった宿を目指す。

「そつえば・・・、」

旅の準備をしておかないとな。

あの王女にかなり不審者扱いされた事を思い出す。

店も開き始めたこの時間、依頼者に会う前に準備しておいた方が良いだろうと気付いて行き先を変える。

「さて、まずは・・・」

ぐるりと周りを一周、見渡して雑貨店的な店を探す。
必要な物は寝袋に食器、外套に保存食の類・・・かな。

「お、あそこに行ってみますか」

やはりと言うかギルドの近くという立地条件、多分あるだろうと思
って見渡せばあった。

通行人を2人ばかりやり過ごしてその店に入る。

「いらつしやい！」

入ってみると整然と陳列された商品、埃一つない床の店内に商店の
二代目的な風貌の20代後半の主人が居て棚の掃除をしていた。

「何かお探して？」

私に近づきながら商売人らしく不躰にならない程度に下から上まで
品定めした若旦那は、私の返事を待っている様子。

「・・・旅の装備をね」

店内にある商品をざっと見回してから一言そう言い、また店内を物
色する。

店の主人はもう一度私を見て、何か理解したのか一つ頷くと言
ってきた。

「・・・、ああ新人さんですか。でしたらあちらのセット商品はい
かがですか？旅に最低限必要な道具が揃って7エルと大変お買い得
ですよ？」

確かに、私は新人なワケで。

合ってはいるが、勝手に納得して初心者が良く買っていくと思われ
る商品をお勧めしてじゃあ決まったらとばかりに離れていく主人。

まあいいかとそちらに視線を移すと1セットになった装備とその中身が書かれた値札があった。

「ありがとう」

一言礼を言つてその陳列棚まで行き、中身を確認する。

「ええと・・・」

スマートな見た目だが手をつ込んでみると割りと暖かい寝袋に雑に扱つても割れたりしない金属製の食器類、水を弾く革素材はじを使つたフード付きで腰にベルトの巻かれた外套、タオルなど生活必需品の他に保存食まで10食1パックが付いている。

それに旅先での負傷に対する応急治療セットと回復系の力石が数個。確かに、新人には最低限必要な物が揃つてるしセット価格で割安、財布にも優しいだろう。

だけど私の場合、新人には違いないが財布の紐が硬いわけではない。むしろ、作ろうと思えばいくらでも・・・それこそ王国を買収、なんて事も可能な・・・

ああ、いけないイケナイ・・・。

いつの間にか気持ちや感覚がおかしくなっていた。軽く頭を振つて今の思考を振り払う。

店の主人もそこまで商売熱心ではないのか、はたまたあまりお客に構いすぎると良くないと思つているのか、チラリと私の動きを見ただけで何も言わず自分の仕事に戻っている。

少しの間考えて、主人に少し近づいて声をかけた。

「・・・あのー」

「はい、なんでしょうか？」

呼びかけに応じて店の主人が近づいてきたので思ってた事を言ってみる。

「治療セットと力石は要らないので、・・・5エルでどうでしょう？」

「んゝ雑貨屋の私が言うのもなんだけど、それらは必要だと思えますよ？」

確かに新人や初心者だったら必要だろうけど。

店の主人はそう考えて、多分親切心からの忠告なんだろうけど私には意味がない。

「まあ、そうなんだけど・・・同じ新人でも法定登録者で治療術も使えるし、力石も作れるから」

「・・・」

あらら、この人もあのコーフィリア嬢と同じ反応ですか・・・完全に固まってますね。

「えっと・・・そんなに珍しいんですか？」

「ハッ・・・申し訳ありません。ええ、確かにかなり珍しいですね・・・というか、私は5歳の頃から22年この家業をやってますけど・・・法定登録者に会ったのは初めてですよ。いやぁ驚いた」

「・・・そんなに少ないのですか？」

「はい、そもそもそこまで強くなっているのに世間に出てこないなんて事がまずありませんので」

流石は商人、なか立ち直りは早かったが・・・まさかそんなに少ないとは思わなかった。

だがお陰でコーフィリア嬢の固まり具合も理解できるというもの。多分、というかほぼ確実に法定登録者もお初ならばナンバーズ行きなのもお初なのだろう。

「そうなんですか・・・」

んゝ失敗したかなあ・・・そこまで希少な存在なら英雄みたいな扱いをされてしまうだろうし顔も知れて自由に動けなくなるかもしれない・・・

「・・・ところで先程の事ですけど」

「あ、はい。治療セットと力石を差し引いて5エルでしたね、少し足が出てしまいますけど・・・まあ記念という事で、5エルで結構ですよ」

第10話（後書き）

すみません、書く事が出来ない状況に陥っております・・・orz
また、この先も不定期になる事は・・・はいorz

第11話

「記念ね・・・」

代金を支払ってそのまま装備し店を出て、今度こそ依頼者に会う為に歩きながら先程の雑貨屋の主人を思い出す。

あの顔は記念というよりも上客を見つけて睡つておこつた感じが
だつたな・・・

「・・・お約束イベントって、現実によくある事だからそういう名前があるってわけじゃないんだな」

割と賑やかな繁華街を抜けて何事もなく「宿の1階」に着いてしまつて、しみじみとそう独り言をこぼしながら宿の敷居を跨いだ。また

「いらつしゃ・・・おや、お帰りなさいませかな？」

「・・・どうもー」

宿に入るとちょうど主人がフロント周りの清掃をしていて、目が合った途端に茶目つ気のある常連さん勧誘活動。

「・・・もしかしたら今日もお世話になるかもしれませんけど、ここに泊まつてるカロリーア
という人に用があつて来たんです」

「ああ、もう依頼を受けてきたんですか・・・っと、ちょっと待って下さいね」

そう言つて掃除道具を脇に片付けチラツと宿泊者名簿に目を通した主人。

やはりというか、こういった依頼者を訪ねて来る人が居る事には慣れている様ですんなりと見つけると私に傍そばのテーブルで待っているように言つとカウンター横の階段を上つていった。

訪ねた客に宿泊客の情報を全て漏らさない事に好感を持ちながら座つて待っていると一人の女性が主人と一緒に降りてきた。

で、その女性の服装を見て全て理解した・・・イヤ、させられた。

「・・・まわりくどい。」

宿の主人に何かを頼んでから近づいてきたその女性、多分力ロリアさんに向けてまず一言。

「は・・・?」

無論、女性は何の事かさっぱり分からずキョトンとした顔をしている。

「戻つたらケイナに言っておけ・・・まわりくどい、親衛隊に入る気はない、賊退治は手伝つてやる、私が倒したモンスターの褒賞金があります。ありがとうございます」

「・・・、・・・なるほど」

そう言つてキョトンとした顔から納得した顔になり私の向かいの席に座るその女性。

こちらに向ける顔は微妙に微笑を浮かべ、この状況を楽しんでいる様に見える。

ケイナと呼び捨てにしても顔色一つ変えない事から自分の立場も弁わきま

えている様子。

「私がカロリーアよ。で、・・・全てお見通しってわけ？」

目線がほぼ同じになってからそう言うカロリーアさん。

「ケイです。これで全てなんですか？」

「・・・いいえ、違うわ」

「では、ケイナの用事はこれで終わり・・・次に、私は合格ですか？」

「・・・ええ、その頭の回転の良さは文句無く合格ね。驚嘆きょうたんに値するわ」

そう言うカロリーアさんは暫く無言で私の顔を見た後、肩を竦すくめ少しはにかんでマイツタわといった表情だった。

「・・・解説が必要ですか？それとも裏へ回って軽くお手合わせでも？」

「いいえ、両方とも契約する事には問題ないわ。それだけ回転が良ければ多少の苦境は問題ないでしょう」

「お待たせしました」

ちょうどそこへ主人がお茶セットを運んできてテーブルに置く。主人の、まるでそれが当たり前であるかのように洗練されたお茶の淹いれ方に感心しているとこれまた当たり前のような優雅さで茶の香

りを嗅ぎ一口含む目の前の女性に育ちの良さが垣間見えた。

「さて、・・・私個人的にはさっきの解説をお願いしたいのだけど、よろしいかしら？」

一息ついた後のこの言い回しに興味があります！的な雰囲気と理性的で直感をあまり信じない秘書タイプといった感想を持って苦笑した。

「・・・何か？」

「あ、いや何も・・・解説、どこから話しましょうか？」

「・・・そうね、まずはなぜ私がケイナの連れと？」

自分のリズムがあるらしく一呼吸置いてからの質問に先程受けた印象を濃くする。

こういうタイプはそのリズムをこじ乱してやれば自分から崩れるが、リズムに乗られると物凄く強い・・・仲間であつたり対等な立場であるのなら頼もしい味方だが敵になると多少厄介だ。やっかい

「それはカリリアさんの服装ですね。ケイナとケイナの連れが鎧の下にほぼ同じ服を着ていました、皆が同じ服を着ているという事は同じ組織に属しているという事とほぼ同義です。それに同じ服同じ組織と言ってもこの辺りでは全く見かけない服、だとするのならそれは地方ではなく中央から来たケイナ達と何等かの関係性を疑つても不自然ではない・・・という事です」

「・・・なるほど」

カロリアさんが納得したように一つ肯うなずいて、意見を言おうとしたのかまた少し間を取ろうとするのに気付いて先を制してみる。

「因ちなみに、まわりくどいと言ったのは前に親衛隊には入らないと断った私をもう一度勧誘する為にかは分かりませんがわざわざギルドに私が受諾しそうな依頼をして、同行期間の延長を図ったから。賊退治は元々ギルドから勧められてまあ出会ったらやるかな位には思ってたから、私が倒したモンスターの褒賞金についてはココから王都まで4日程でランク制限がB以上なのに報酬が50エルは高すぎる、ならば何かあると思うのが当然、元手も必要だけどケイナと居た時に倒したモンスターの証明部位をちゃんと獲っていたのを思い出してコレが元手かと推測したわけですよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言で少しだけ複雑そうな顔をしているカロリアさんと、それを観察する私。

バアアアーーン！！！！

それにカロリアさんがリアクションを返そうとしたのだろう口を開いた時。

いきなりの大音響はこの宿の入り口ドアから発せられたもの。

ビクツとして視線をドアに向けたカロリアさんに習って振り返るとそこに居たのはパニック状態と言えそうな程取り乱したクフトだった。

カロリアさんは入り口に向かって座っておりちょうど柱の影で外が見えなかったので多少驚いたのであろうが、私は窓からチラリとギ

ルド方向から走ってくる人を視界の隅で見ていたので入り口に背を見せていても驚く事はなかった。

そして傍^{はた}から見ると奇妙な静寂に包まれたその空間を、一人の男が台無しにしてくれたに對してなのか、カロリアさんがスツと立ち上がってクフトの元へ歩いていく。

その姿には一分の隙も無く、尚且つ内から滲^{にじ}み出てくるかの様なその怒りのオーラはこの宿の1階を覆^{おお}い尽くさんばかりだった。

「・・・クフト、修理代はあなたの分け前から出しておくから」

そう言っでカロリアさんは怒りオーラ全開でクフトの前に腕を組んで立ちクフトを睨みつける。

まるでドラゴンの巢に何も考えないで突入し母親ドラゴンの怒りを買った大バカ冒険者の様だったとは宿の主人の後日談。

クフトはクフトで、まるでここまで全力疾走でもしてきたかのように息を切らせていたがこの一言でハツと我に返ったのかドアを見て固まっている。

そこには上側の蝶番^{ちょうつがい}が取れ、嵌^はめ込みガラスが粉々（こなごな）になって壊れたドア、それにドア脇の壁にも真新しいドアの取っ手の形をした凹^{へこ}みがあった。

ドアの壊れ具合を見るに腐っても親衛隊、という事なのか・・・

「この様なドアぐらいいくらでも・・・ってそれどころではない！カロリア！ひめっいやケイナは何処^{いどこ}もといどこにおる！？」

明らかなお金持ちの見下し発言に宿の主人も閉口させつつ、自分がココに来た目的を思い出した慌て始めるクフト。

「2階に居るのか！？どこかに出かけていらいるのか！！？」

「少し落ち着きなさいクフト」

カロリアさんとクフトの痴態を眺めつつ、放っておけば上に居るケイナが降りてきて黙らせるだろうと独り我関せずを貫いて少し冷めたお茶を飲む。

「・・・何の騒ぎだっ！！！」

やはりというか、ちよつとして自分の部屋から出てきたケイナをチラリと横目に見て、まだ我関せずを貫く。

面倒・・・この言葉が私の心の半分近くを占め、残りの大部分はこの後の展開を見世物として楽しむ事にしたから。
で、クフトはケイナの剣幕に驚いてちよつと放心気味。

「あ、・・・えつと、」

「またいつもの様にクフトが馬鹿をただけです。すみません主人、ちゃんと修理代払わせますので」

うわっ・・・カロリアさん超毒舌って、いつもの事なのかクフト・・・。

そこにすかさず口を挟むカロリアさん、・・・やっぱり秘書タイプなんだろうなあ。

宿の主人はカロリアさんの言を聞いて一つ頷き了承。
もしかしたらコレが初めてではなのかもしれない・・・

「またか・・・クフト！何度言えば分かるんだっ！」

「いいえや、ひケイナ、今度ばかりは緊急度Zでだ！」

「・・・何その緊急度って」

おおー、カロリアさんツツコミきびしー・・・。

「・・・あの！あのケイとかいう男の事をギルドで聞いてきたのんだが」

「のんだが・・・何語でしょう？」

「うるさいカロリア！」

おおー・・・

「・・・クフト、落ち着いて、ゆっくり、喋りなさい。はい、深呼吸ー？」

うわーケイナまで・・・うん、弄られキャラ決定だな。

「ハ・ハイ！・・・スーハー・スーハー」

「はい、ケイがギルドでどうしたって？」

そういった一連の出来事を近くに寄ってきた宿の主人と苦笑しながら眺めていたのだが・・・

「ハ、あの男支部では登録できず王都に行く事になったとかっ！」

「・・・声が大きい」

ボソツと突っ込みを入れつつこちらの様子を見るカロリアさんの視

線を感じながら宿の主人の驚いた顔を見つめて苦笑する私。

ていうか、クフトのバカはまだ私に気付いていないのだろうか・・・
気付いていないんだろ？なあ・・・背中向けてるし。

「ん？ああーっ！！」

周りに宿の主人とか他の人が居る事にも気付いていないのかも・・・
と思い椅子の音をたてながら振り返ってクフトを見てみると、その
音で今更に気付いたのかギョツとした顔をして私や宿の主人を見る
クフト。

ん、気付いてなかったね確実に・・・

「・・・よお」

「あ、クフト。王都までの護衛に彼雇ったから」

「おやおや、ナンバーズ入りと初仕事おめでとうございます」

「どうもー、・・・で、ケイナ明日出発でしょ？私の部屋は？」

「あ、うん・・・クフトと相部屋オツケー？」

ケイナの言に宿の主人の祝詞しゅくしを受けて、返礼して、必要な事をケイ
ナに聞いている最中、面白い様に固まっていたクフトをチラリと見
て宿の主人に向き直る。

「主人、部屋空いてるか？あんな奴と同じ部屋自腹切つてでも嫌だ
から」

「はい、昨日のお部屋が空いております」

「じゃあそこで」

「毎度ありがとうございます」

「明日1つ時（午前8時）ココ集合ねー」

ブチッと切れて私に襲いかかろうとしカロリアさんに抑え込まれケイナに拳骨を貰ってるクフトを尻目に主人から鍵を受け取って、ケイナの指示を手の平で受けながら自分の部屋に上がっていった。

第11話（後書き）

んゝ始めの方で書いたとおり、思いつきで始めたツケが・・・上手く書けないorz
更新速度・・・ああorz

第12話

その日の午後。

「・・・暇だ」

ケイナとカロリアさんは買い出し、クフトは装備の調整だとかで出かけた。

私は午前中にギルド登録もしたし武器屋・道具屋をまわって装備も揃え終わっている。

「散歩、ぐらいしかない・・・か」

散歩していればもしかしたらお約束に出会えるかもしれない、と心の隅で思いながら宿を出る。

宿の前の道は州都中央部に割と近く、ファスゴトに東西南北4本あるメインストリートの南通から1本外れた所にある適度に賑やかで適度に静かな場所。

今でこそ大陸では名の知れた大国であるリーロン王国だが、statt大陸では建国時期が周辺諸国よりも・・・というか一番新しい。それはちょうどリーロン王国の国境線に大陸を東から中東南部そこから大陸南部へと連なっているとても険しい山脈が理由として挙げられる。

歴史的に見て人はチユート大陸から来たかstatt大陸の中西部で発祥したとされており、そちらの方でよく遺跡などが発見されている。

リーロン王国の国土はそんな地形的要因があって長らく放置されてきた土地であったのだ。

そこに目をつけたのが王族の先祖達で、恐らくおかしな術を使うな

ど有象無象の迫害から逃れて来た人達と思われ今のリーロン王国が術大国である事からも推測される。

そんな先祖だからであろうか、王都や4大州・辺境10州の州都全てが防衛力の高い街の創られ方をしており強固な壁が人口の増加と共に幾重にもあつて、一定距離毎に90度折れて曲がっているメインストリート、王都は中央部に街全体を見通せる塔と堀・城壁と城、州都は中央部から少しだけ王都側に近い場所にある塔と堀・城壁と城。

国全体を1つの防衛装置として創られている。

ここファスゴトは南側が多少緩やかな崖を伴った低地なので外からの防衛力は更に強いだろう。

だが同じ様に創つてあると言う事は王都や他の州都の地理が明るくなくとも何とかなるという事で・・・

「お陰で迷子にはなりにくいけどね・・・」

そんなある意味どうでもいい事を考えながら州都城に向かって散歩をしていると午前中に世話になった雑貨店の店主が店から出てきたところに出くわした。

「と、先程はどうも」

「おや、先程はありがとうございます。すみませんがこの荷物を急いで届けなければならないので失礼を・・・又ご贖^{ひいき}に！それではまた」

急いでいたようでサッと挨拶して歩いていってしまった。

「んー一人でやってるのか。・・・それにしても、暇だ」

店主が居なくなつた雑貨店を見ると、店主不在の札が掛けられており中には他に誰も居ない様子。

仕方なく又当ても無い散歩を再開しようと歩き出した途端・・・

「つていう展開は無し、・・・つと」

気付けば折り返し地点にと思つていた州都城正門前に着いてしまい他人には聞こえない様な小さな声で愚痴をこぼす。

そこはちよつとした広場になっていて、門番に不審に思われない程度に観光客的な風体ふうていで周りを見渡すと三角形の広場になっていた。無論・・・ここにも防衛という色が見受けられ広場に通じる道は全て道幅が細くなつてゐる部分があつて段差があり、周りの建物も籠こもつて戦える様に堅牢に創つてある。

「ふむ・・・」

だが今は戦争中でもないので広場にあるものと言えば数店の食べ物や土産物の屋台に街の人々、それに観光客の姿。

「・・・ぐるつと城を一周して帰るか」

屋台で果物を使ったジュースを買い喉を潤しながらまだある暇な時間を潰す為に歩き出す。

ココまで来るのに約1時間、後4時間は暇を潰さないと大体夕食の時間である3つ時半（18時30分）にはならない。

周りの風景や建物を見たり露店の商品をひやかしたりしながらもう1時間、州都城を4分の3回つて東のメインストリートの東通を少し過ぎた辺りだった。

「おーい、ケイー！」

後ろから呼ばれて振り返ると50Mぐらい離れた東通の角からこちらを見て手を振っているケイナ・・・。

と、ケイナと私を何事か？と見つめる観光客やら通行人が約10名・・・。

正直、勘弁してほしい。

周りから生暖かい目や冷やかしの目、果ては妬^{ねた}みや嫉妬の目。

流石に声を掛けてひやかしてくる者は居なかったがこの注目は出来れば敬遠したい類の物だ。

ケイナもムスツとした私の機嫌に気が付いたのかちょっとだけご機嫌^{うかが}悪い気味に近寄ってきた。

「えつと・・・？」

「私はああいった注目のされ方がとても嫌いです」

そのまま二人で歩き出して話しかける。

「・・・、・・・ん？？？」

ああ、全くもって気付いてない・・・。

こんな所はやはり王女様、注目される事に良くも悪くも慣れ過ぎているわけだ。

「もし、この辺りに理由はどうかあれ私やケイナ、もしくは私達を狙っている輩^{やから}が居たらどうなります？」

「あー・・・なるほど。」

「まあ私は別の理由で嫌いなんですけどね・・・ところでカロリアさんはどうしました？一緒に出掛けたいですよね？」

「っ！・・・カロリアなら買出しの荷物持って先に宿に帰ったわよっ」

オチをつけられいい様に遊ばれた事に気付いて多少不機嫌になったっぽいけど、質問にはきちんと答えるケイナを見て微笑笑する。

「・・・なんなのよ？」

「いや、別に」

暫らく無言で歩き、州都城の正門前広場まで戻ってきた時だった。

「ところでさあ」

「隊長職でも却下です」

「ハア・・・先読みされ過ぎて会話にならないわ」

そうやって少しばかりケイナを弄りながら歩いていた私は前から歩いてくる2人組みに注目する。

「おい、あれ・・・」

「おお、イクか？」

二人は会話をしながらこちらに向かってきていたがその視線はケイナに固定されていた。

多分、この辺りや王都の出身ではなくケイナの事を知らないのだから。

先程ケイナに声をかけられ注目していた人の内2・3人、ケイナの事を分かっている節があったので、ファスゴトやこの辺りでもケイナの知名度はソコソコあると思われる。

その冒険者風情ふぜいの二人はそれなりの自信が持てる程にはやっていているらしく

装備も揃って見た目だけは小奇麗こきれいにしている感じ。

「おや姉ちゃん、イイ所で会った。ちょいと俺らと遊ぼうや」

顔やナンパの仕方については・・・甘ーく見積もっても30点以下の赤点だろう。

二人してケイナの前方両脇を挟み隣に居た私は完全に無視されて蚊帳の外。

「おお！お約束出たーっ」

なんて、小さく喜んで傍観者ぼうかんしゃに徹てつしてみるとケイナは不機嫌丸出しで私を睨にらんでいる。

「・・・ちよっと」

「なあいいじゃんこんなのよりよっぽど俺達の方が楽しいって」

「そうそう、あっちにさ新しく店できたんだゝ行ってみようぜ？」

バカなナンパ男2人がまともに喋れたのはここまで、1人がケイナの肩に手を置いた瞬間までだった。

「触るなクス共っ！」

そして1秒後にはケイナの両手から発せられた小さな火属性術の直撃を食らって3M程吹っ飛ばされ転がっているバカ2人。

「・・・っ、てめえ」

「あーあ、やつちゃった・・・」

「ケイツ！あんた私の護衛に雇われてるんでしょがっ！！」

ボソツと言った私の言葉がケイナの耳に届いたのか元々そうしようと思っただのか、バカ2人には目もくれず詰め寄ってくるケイナ。その目と怒気は一国の王女にあるまじき苛烈さ、一般人なら気絶しそう・・・イヤするだろう。

「明日からな」

ピキッ！というか、ピシッ！・・・というか、そんな擬音が聞こえそうな程青筋を立てて固まるケイナを横目に見つつバカ2人を見るとほんの少しふらつきながらも立ち上がって今にも襲い掛かってきそうな雰囲気。

「てめえら、いい度胸してんな・・・」

「俺らドレン傭兵団に楯突いてタダで済むと思うなよ・・・」

なんて、言いながら自らの得物を構えるバカ2人。

こいつらココがどんな場所だか分かっているのだろうか・・・？
州都城は目の前、衛兵も門番も居る。

「お前らがタダでは済まぬわっ」

「君達、大丈夫かね？」

騒ぎが大きくなる前に誰かがしてくれた通報によって・・・という
か見ていたのだろう衛兵4人がバカ2人を取り囲み、武器を取り上
げられて御用となる。

「待てよ兵隊さん、先に手え出してきたのこいつらだぜ！？」

「捕まえるんならこいつらだろ兵隊さんよお」

「愚か者っ！ワシ等が見ていないとでも思ったか！！」

リーダーらしき衛兵が一喝^{いっかつ}し、残りの3人がテキパキと捕縛しバカ
2人を連行していった。

「てめえら今度会ったら覚えとけよっ！！」

「俺等敵にまわして逃げられると思うなっ！」

そんな、お約束をかましてくれながら連行されていくのを見つつチ
ラツと横目でリーダーらしき衛兵を見る。

バカ2人と衛兵3人はもう行ったんだけど・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

なぜかリーダーらしき衛兵がこの場に留まり何かを待っている、というかケイナを見、私を観察している。

私見だが彼はケイナの事を知っているようだ。

「・・・・・・・・なにかな？」

仕方なくケイナがタメ息混じりに聞くとビシッと敬礼する衛兵。ケイナの事を知っているで確定ですね。

「ハッ、この者は・・・・ご友人か何かでございますか？」

まあ確かに、私は一切手出ししていないから・・・・武器は持っているが持つているだけの旅人とかそんな風に解釈した様子。でも彼にも腑に落ちていない様でチラチラと私を観察している。

「いや、護衛・・・・だけど明日、からの契約なのよ」

ケイナの発言と視線が棘の様にチクチクと私を刺し・・・・衛兵が憤怒とも呆れとも取れる様な微妙な表情でケイナと共に私を見ている。

「・・・・別に助けてやつても良かったんだが、手出した事で事情聴取とか気に入らない暇潰しはしたくない。それにこれだけ門が近ければ衛兵が出てくる事は分かっていた。ならば事は穏便に済ますのが一番でしょう」

仕方ないので一応の弁明はしておく。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

やはり一応の弁明、納得してはくれないようだ。

「なるほど・・・ね」

「あ・・・・・・・・そうか、では私も任務がありますので」

ケイナができるだけ身分を明かさない事を思い出した様子の衛兵は色々と慮おもんばかってか、少しだけ逡巡しゅんじゅんした後チラリと私を見つつ敬礼して持ち場に戻っていった。

「・・・なるほど、ね」

「・・・・・・・・」

その後、宿に着くまで微妙な空気が続き・・・

「なるほど、ね・・・？」

クフトとカロリアさんと合流するまで機嫌は直らなかった。

第12話（後書き）

・・・更新速度、頑張りますなどとほざきましてすみませんすみませんすみませんorz

第13話

翌日、馬車の中。

クフトが若干寝坊し遅刻するというハプニングはあったものの、ほぼ予定通り1つ時（8時）過ぎには出発した私達。

いってらっしゃいませ」と「宿の一階」の一家4人総出の見送りを受けたの出発だった。

「全く、クフト・・・あなたという人は・・・」

宿の裏に泊めてあったケイナ達がいつも使っているという馬車に乗って街を出た所、カロリアさんの説教がひよんな事から始まった。

馬車に乗った時からなにやら2人で論戦とも口喧嘩ともとれる会話をしていたので何が切欠きっかけだったのかは分からない。

「いや、昨夜あれだけ姫様達が・・・」

「言い訳は聞きたくありません、親衛隊たる者1日や2日ぐらい眠らずとも・・・」

「いやしかしですね、あれだけ飲まされて・・・」

「言い訳は聞きたくないと先程・・・」

クフトが寝坊した訳、それは単に昨夜ケイナとカロリアさんがクフトを強制参加させた宴会。

私も参加させられたが今まで酔っぱらった私が何をしてきたか・・・懇々（こんこん）と話した途端に持っていたグラスをカロリアさんに取り上げられた。

おかげで私は初めの1杯、ほろ酔いの一番気持ち良い時にソフトドリンクに切り替わったので翌日もいつも通り起きられたのだが・・・その分クフトに回ったのだろう。

クフトは酔っぱらってテンションが上がった二人からほぼ強制的に酒を流し込まれていた。

それでも少し寝坊した、だけで済んでいるのはあまり飲めない私から見れば脅威としか言い様がない。

というかケイナもカロリーアさんも結構、いやかなり飲んでたはず・・・

そんな馬車の中、私は御者席でこの馬車を操縦しケイナはその御者席の後ろで席にもたれかかって眠っている。

こんな説教の中よく眠れるなあなんて思いながら王都に向けて馬車を走らせている。

ただ、仲が良い程喧嘩する的な空気が漂^{ただよ}っているのでいつもの事なのだろう・・・と思う。

同期入隊だと聞くしケイナも何事もない様に寝ているし・・・と、そんな事を考えながら小高い丘を越え後ろに街が見えなくなった小さな森の手前、20人弱の人達がまるで関所の様に通る人達を監視している。

「あゝお礼参りですか・・・」

初めは見るからに兵隊の一団が関所みたいな事をして何かあったのかと思っただがよく見ると昨日の2人が居るのでそう理解する。

「ケイナ、・・・起きろ」

馬車の中に知らせた方が良いかないとケイナを起こしにかかったのだ
が起きない。

熟睡しすぎ・・・

「姫様は馬車に乗るとそう易々とは目を覚まされぬっ」

それに気付いたクフトがそう言いながらケイナを護る^{まも}ように触れていた私の手を払った。

無論、敵意丸出し。

・・・まだ根に持つてるのかこの人はっ・・・ってケイナ、何気にお約束持ってたのね・・・

「・・・昨日ケイナをナンパしようとして軽くあしらわれた輩^{やから}がそこで仲間を集めて網を張っている様だが？」

「何っ！！？」

「あら・・・」

指を指して2人に教えたんだけど・・・顔の表情はほぼ同じ敵意を見せても言っ台詞がここまで違っ^{こっけい}と滑稽に見えてくるから面白い。

「とりあえず、どうするの？」

「その様な輩なぞ「あんたは黙ってて」っ！」

「・・・、・・・で？」

カロリアに除^のけ者にされたクフトは顔を真っ赤にして喚^{わめ}いている、がカロリアさんが普通に無視しているので私も無視しておこう。

「こちらの身分を明かす事はケイナ様の指示がない限り出来ません」

「そのケイナは、馬車に乗ると寝てしまつて起きない・・・と」

「はい、という事でよろしくお願いしますね？」

このカロリアつて姉さん、私に丸投げしましたよ・・・

いつの間にか静かになつていたクフト、見ると私とカロリアさんの華麗な無視に心を折られたのか馬車の隅で落ち込み始めていた。

「その馬車止まれ！！」

そうこう言つてゐる間に馬車はドレン傭兵団と名乗つていた2人の居る集団の近くまで来てしまい、数えたら17人の内の1人に停止命令を受けた。

というか、全員で道を塞ぎ半円包囲してきたので止まらざるを得なかったというのが正解かな。

「何の騒ぎだ？」

「こいつか？」

「・・・ああ、こいつだ。間違えねえ！」

一応、知らぬ振りをして上手く抜けようとしてみたけど、相手はアツサリこちらを無視して停止命令だした男が昨日の男の1人に確認を取った。

やはり、確実に昨日の事だった。

「ふうん、こいつがねえ・・・おいてめえ！」

それから暫く、目の前に居る17人の『無駄な抵抗』を観察してみた。

「あの術、本当に破れぬから腹が立つ・・・」

ボソツとそう呟いたのはクフト。

うん、前に自分でやってるからねえ・・・ところでクフト、顔が少し青いよ？

多分独り言だろうから私も心の中でクフトを弄るに留める。いつの間にか復活してこの余興？を楽しんで？いる様子。

「おいお前」

5分程経つただろうか、一人の男がドレン傭兵団の団長と名乗り声をかけてきたので視線を合わせる。

「何か？」

「名はなんと言つ？」

「・・・ケイ」

「・・・ケイ、か。こんな事（結界）を無詠唱で出来るお前が何故内の者を？」

・・・納得。

昨日の2人自分の都合の良い様に話したのね。

「決まっている、その二人が私の依頼主に対し無礼を働いたからだ」

私のその一言と私の顔で団長も納得がいったらしく、部下に命じて結界の隅まで逃げていた二人を連れてこさせた。

手を出したのは私ではなくケイナだが、それは言ってしまうとまた面倒になるかもしれないので伏せておく。

「だ・団長……？」

「え、ちよつ……」

ゴツツ
ドゴツ

二人を跪かせ脳天に一発ずつ、いい音鳴ったねえ……

「すまんが、これで許して貰えないだろうか？」

チラリと見ると、中々結構な一撃だったらしく二人共仲良く土下座しながら気絶している。

「・・・良いだろう、こちらとしては昨日で罰は与えたしココを通してもらえばそれで良かったのだが・・・」

「なに、ケジメだ。．．．それで、だ．．．」

「ああ、既に結界は解いてある」

[illegible]

⌋

この人達、とても面白いんですけどっ！
 氣絶している２人と団長以外の１４人、まるで森林浴にでも行つた
 みたいに深呼吸してるし。

「あ、姫様・・・あ」

どうやら馬車が止まってる事でケイナが起きたみたいだけど、クフト・・・

「・・・姫様？」

「クフト・・・」

後ろからカロリアさんの呼ぶ声、またカロリアさんの説教決定だねクフト。

「・・・で、なんで止まってるの？」

と言ってひょっこりと御者席に顔を出したケイナ。

「・・・何この状況・・・？」

馬車の周りには14人の仮想森林浴、土下座した状態でピクリとも動かない2人、ただ一人姫様の単語を聞いて訝^{いぶか}しげにケイナの顔を見ている傭兵団の団長。

クフトはしまったって顔で固まってるしカロリアさんもそれを睨^{にら}みつけて動かない。

「身分がバレかかってる」

仕方ないので一番近くに居る私が自然な感じに上体^{じょうたい}を反^そらし、小声で知らせる。

「・・・そう言えば、第二王女って確か・・・」

「・・・・・・・・どうしようっ。」

ケイナが、・・・いやケイナまでも私に丸投げしてきたので仕方なく傭兵達の注意を引く。

「おい、団長」

「ぬ、なんだ？」

「いい加減、退いて欲しいのだが？」

後ろを指差しながら苦言を呈してみる。

団長は道の真ん中に立っているし、気絶中の二人もそのまま、他の14人も其々（それぞれ）立っていて、未だ道は塞がった状態。^{いま}
^{なにげ}何気に私達の後ろに3組のグループが何事かと様子を見に来ながら待っているのだ。

「おいアスペンとニング、サイとフード、テイダとプランの6人」

「ハッ！」「」「」「」

「それぞれ二人一組で足止めしちまった3組の商隊に謝罪した上で、王都までの無償護衛を申し出る」

「それは・・・」

「いつも通り給金はこちらで出す」

「了解！」「了解！」「了解！」

「団長、この二人はどうしやす？」

「バカ二人か・・・傭兵団の装備だけ剥^はがしてそこら辺に転がしておけ、クビだと書置きしてな」

「分かりやした」

あの後すぐに道を開けて王女様一行と足止めした3商隊を送り出したドレン傭兵団。

そのまま、すぐに準備を整えて出発した6人を見送る。

「団長、何の為^{ため}に？」

出発準備の指示を出しつつ脇に控えていた副団長が訝^{いぶか}しげに聞いている。

「勿論^{もちろん}、俺達の食^{ぶち}い扶持をつなぐ為さ」

第二王女がハンターになって南部を拠点にしてるとは聞いていたが・・・
・こつとも早く出会えるとはな・・・

副団長にはそう言つて、俺は隠しきれたつもりで王都に向かつていった王女様一行の方を見ながらほくそ笑んだ。

第14話

一悶着あつた昨日とは違い、ファスゴトを出て二日目の今日はもう夕方だと言うのにモンスターの一匹すら出てこない。

「・・・暇すぎる」

昨日はあの後もモンスターの襲撃に遭つたり、休憩中にクフトが王都から来た大きな商団と諍い^{いさか}を起こしたりと話題？には事欠かなかった。

「旅なんてそんなものですよ」

馬車の中でケイナは昨日と同じく熟睡、クフトも昨日の説教と言う名の拷問を半日以上受けダウンしている。

クフトは昨日、一睡もしていないし、昼飯・夕飯・今日の朝飯と丸三食抜かされている。

弄られキャラだろうなあとは思っていたけど、ココまでとは思わなかった。

「そうなんですけどね」

クフトをココまで追い詰めたカリリアさんは・・・至って普通に、寝ている二人の邪魔にならぬよう御者台に私と二人で座っている。

「・・・クフト、大丈夫ですかね」

「気にしなくても良いわ、いつもの事よ」

チラツと振り返ってクフトの惨状を一瞬視界に入れ、何事もなかったかの様に馬車の手綱たづなを握る。

昨日、クフトの失言の所為せいでドレン傭兵団がこちらの事情をほぼ確実に察した事が分かった。

あの後、ケイナの一言で森を抜けた所で休憩し後ろに居た3組の商隊を先に行かせたのだが・・・その3組の商隊にドレン傭兵団のメンバーが付いていたのだ。

本来、たったあれだけの時間を足止めしたぐらいで慰謝料的なものなど一切発生しない。

せいぜい頑張って謝罪、諸事情で半日以上とか丸一日、足止めさせたのなら話は分かるのだけれど。

となれば、あの団長が余程誠実かバカかこちらを意識しての行動・・・位しか思いつかない。

それを見た私が口を滑らせた所為でもあるのだがそれはそれ、弄られキャラとしての役割をという事で。

自分を納得させつつ先程チラリと見た、ボロボロになってまるで死体の様に眠りこけるクフトにほんの少し同情した私・・・今度は気取られぬよう視線だけを動かしてカロリアさんを見る。

「・・・何かしら？」

「いいえ・・・」

カロリアさんを怒らせるのはやめよう・・・多分、それが身の為だ・・・

流石さすがに、気付かれるとは思ってなかったので少しだけ、心の中で慌てた。

「あ、確かもう暫くしばし行くと左側に池が見えてくるわ、今日はそこに泊まりましょう」

「了解です」

「・・・ところで、・・・」

そう言うといきなり私の目の前まで身体ごと顔を寄せてくるカロリーアさん。
仰け反らせて最低限の距離を保ったがカロリーアさんの顔の表情がとても真剣で、何か後ろに聞かれては不味い話でもあるようだと察してこちらにも構える。

「・・・何でしょう?」

「・・・どうして私だけ、妙に、硬い言葉使いなのです?」

それはそうとカロリーアさん、こんな仕種しゅいつ覚えたのだろうか・・・と邪智じやちしつつさてどうしようか・・・
カロリーアさん、実は年下らしいし最年長私だったりするし・・・
実力でも私が上というのはクフトのお陰で知られているし・・・
ここで「あー」とか「うー」とか、挙動不審な事はしてはいけない。
そうすると色々な・・・フラグが立つから。

「・・・んー」

だから、どう説明しようかな?・・・どう言ったら分かってもらえるかな? 的な雰囲気を出す事が重要。

肝心なのは言うべき答えはある、だがどう説明すればベストなのかを考えていると思わせる事だ、そうすれば・・・

「・・・何?何が言いたいのかしら?」

と、少し心配させるが機嫌は損ねずに時間が稼げる。

こういった心の機敏は、元の世界に居た時付き合ってた彼女から色々パターンで教えられたのだが・・・役に立つ時が来るとは露程つゆにも思わなかった。

「んー・・・カロリアさんがカロリアさんだから、でしょうね・・・」

「・・・は？」

「すみません、考えたんですがこれ以上の言葉が出てきませんでした」

で、その後は「貴方がアナタだからあなたなのだ」と言った抽象的な答えを出し、「これ以上の言葉は見つからない」と×（しめ）る。すると・・・

「はあ・・・なんとなく分かったような・・・？」

と、なにやら自分で勝手に有耶無耶うやむやな結論を出してしまうのだ。

「あ！あの池ですね？・・・あの木の横で良いですか？」

「え、ええ・・・そうね」

結論を出した頃合ころあいをみて話題を変えればもう完璧。

野営の準備をしてから夕飯を摂った私達。

「・・・それじゃ、行ってくるねー」

女性陣二人が近くの池に水浴びに行く事になった。

なんでもココを通る時にはいつもココで水浴びをしているとの事。

「覗いたら・・・ありえないわね、なんでもないわ」

そう捨て台詞を吐いて池に向かったケイナ、とそれを警護する為に
ついていったカロシアさん。

ありえないわね、は主にクフトを見て言った言葉なのでそういう方
面に対する信頼はあるのだろう。

一方馬車近くの焚火周りに残った私とクフト、する事もなければ物
凄く空気が悪い。

このクフトの妙な敵対心というかライバル心というか・・・どうに
かならんものか・・・

と思っていたところへバカが二人現れたのを確認する。

「なあクフト・・・」

「なんだっ？・・・っ、貴様が呼び捨てにするな！」

話しかけただけでこれだ・・・

「・・・そんな事はどうでもいい、あんた何で槍なんだ？その体格
なら斧とか斧とか斧とか・・・」

「待て！斧しか言っていないじゃないかつ、しかも私にそんな厳つい
武器は似合わぬわー！」

決してゴリラの様な体格とかではなかったのだが・・・あまりの敵意に思わず弄いじってしまった・・・

「まあそれはどうでもよくて・・・」

「・・・貴様という奴はあゝっ！」

激昂し立ち上がって焚火越しに傍そばに置いていた槍を構えるクフト。

「・・・本題だが、立ち上がったついでにあつちからケイナ達をノゾキしに行ったバカ二人の対処を」

そう言い、王都方向の少し離れた所に同じく泊まっている一団を指さす。

「何っ！！もつと早く言えっ！」

一団の位置を確認したクフトは最短で接敵せつてきするべく池と一団の間に向かつて走り出す。

「・・・殊戦闘ことに関しては、なんだよねえー」

と思った途端、バカの一団の方から口笛らしき音。

どうやら残った奴、もしくは奴等やつらが見張りの役割を負っていたらしい。

ノゾキの常習犯、って事なんだろうけど・・・なんだかなあー
どこの世界に行ってもこういうのは居なくならないのだろうか・・・
と自分もそういった意味で健康な男である事を棚に上げて思う。

「なあ、そうは思わないか団長さん？」

「っ……何がだ？」

背後から、多分今着いて私を見つけたので近づいてきたのであろう
ドレン団長に話しかけてから振り返る。

無論私の心の中なんて分かるはずもなく、罰が悪そうに立ち止まっ
ている。

多分、驚かそうとしたのか気配を断ち音もなく近づいてきたのに逆
に驚かされた事でそんな表情なのだろう。

「いや、なんでもない……で、何か用？」

「あ・ああ……部下が迷惑かけたからな、正式に謝罪しとかねえ
と」

「ふうん……ま、いいけど。ケイナなら暫く
待ってれば帰ってくる」

髪かみの毛から爪先つまさきまでじつくりと団長が居心地悪そうにするまで見て、
値踏みねぶみしてから謝罪と言う名の営業活動にゴーサインを出す。

まあ、私も一応雇われの身なので拒否する事は出来ないのだが……。

「では待たせてもらおう」

私が拒否出来ない事を分かっているのかこちらが待つ事を了承した
途端、一言言つて焚火ふちの縁に座り込む団長。

そして座ると徐おもむろに火にかかっていたポットから勝手にお茶を注ぎ、
完全に寛くつろいでいるこの人。

待っていても良いとは言ったが寛くつろいでいると言った覚えはないのだ

がな・・・

「・・・ところで、依頼主ってこたああんた王都までの仕事だろ？」

「ああ、そうだな・・・」

「やつぱりな、じゃあその後俺に雇われねえ？いやさ、あんた若えくせになかなか見所あるって思ってたよお」

この団長に遠慮とかそういう類たぐいの言葉はあるのだろうか・・・と一応顔には出さずに考えていると今度は傭兵団に勧誘ときた。

この世界だと団長の感覚で物を喋るのが一般的なのか・・・？

「そうだなあ・・・、あんたは若えけどなかなか使えそうだから給金は・・・一日に1エル。どうだ？」

この遠慮の無さというか図々あ(ずうずう)しさにまだこちらに来て日の浅い私が中あてられ、閉口していると何を勘違いしたのか話を進めるこの団長さん。

いやあなた、まだ名前も知りませんよ？・・・と元の世界の常識を説ときたくなってくる。

というか、一日1エル・・・素泊まりの宿が一日4000～5000ドン、安い定食屋の食事が大体一食500ドン・・・微妙な金額だな・・・というか元々やる気ないし。

「・・・今回の契約、4日で50エルだけど？」

「はあ！？マジ？」

「うん、それにお金に困る事はこの先一生無いし」

「おいおいどこの坊ちゃんだよっ!!」

断るつもりで、というか雇われる気は全然無いが今の契約の話をちよつとした嗜虐心^{しやく}＋で言ってみた。
うん、この人も結構面白い人っぽい・・・芸人で言うツツコミ、だな・・・

「いや坊ちゃんも何も「マテッ!」・・・何?」

「それ、国营ギルドの腕輪だよな?」

それ、と団長が指差したのは私の左手首に着いているギルド所属証明となるギルド証。

「そうだが」

ふと、先程の嗜虐心が少しばかり戻ってきたが今度は自重^{じゆう}する。
こういう傭兵団は仕事があれば全国何処^{どこ}へでも行く、その先々(さきざき)で触れ回られたら堪^{たま}ったもんじゃない。

「あんた、実は結構実力者かなんかだろ?」

「いや、あのバカ二人に遭^あった日に登録した」

「はあ?3日前??ありえねえし」

「事実ですが・・・」

「バカ言ってんじゃねえよ、マジありえねえって・・・」

手をヒラヒラとさせ全く、微塵^{みじん}も信じていない団長さん。

「彼の言っている事は本当よ」

自分と私とは別の声が聞こえ、団長さんが背後に振り返る。

私はかなり前から気付いてきたがそこにはケイナ、そのすぐ後ろにカロリアさんとクフトが居た。

第14話（後書き）

ハハハ…月一ペース…orz
難しいのねえ…物書きって、と凹みまくっているこの頃…orz

第15話（前書き）

まずは言い訳を・・・

不注意からパスワードを紛失してしまいましたorz

色々（登録時のPCメール等）探してみたのですが見つからず、その内読んでくれてた方々には申し訳ないと思いつつ記憶から薄れ・・・と。

そして今頃になってひょんな事（ケータイで投稿する事もあるか？

と登録時に入れておいたのを忘却、機種変更時に発見）から発見し・・・

・・・すみませんでしたっ！！！！

第15話

「なるほど、そういう訳か・・・」

「ん、そういう事」

「・・・ってそんな話、信じられるかつ！」

戻ってきた3人を交え、私の身の上を信じ・・・基納得もとさせようと
しているわけだが・・・。

「と言われましても・・・」

と困惑顔のカロリアさん・・・。

「あのな、国の軍隊1個小隊が3日と持たず壊滅するような聖地に
住んでてだつ、此度の門街壊滅事件の折おりに旅に出てえ、偶然出会っ
た人から登録しろと教えられてファスゴトに来てえ、そこで出会っ
て今ココに居るだあ？」

確かに、ほとんどの人間が信じられないと答えるのが当然の私の身
の上話。

自分でも聞いてて、なんだかなあと思う・・・。

「ええ、その通りですが」

なんだかなあとは思うがそれが私の、この世界での身の上なわけ
で。

「いや、どう考えたってありえない……と言いきりたいんだが、本人含め誰も嘘ついてないって顔してるのがマジありえねえ……いや信用するけどさ？信用するしかねえし？」

「ありえないという事はありえないんだがな……」

そんな私の呟きを無視して、それでもまだブツブツと独り言でありえねーとか言ってるまだ名前も知らないドレン傭兵団の団長さん。

前の世界のネタを引用したのにスルーされて微妙に凹^{へこ}む私。

「ところでケイ、彼なにしに来たの？」

ブツブツ言ってる団長さん本人は暫^{しば}く放^{はな}つておいて、何故^{なぜ}か凹^{へこ}んでる私に用向きを私に聞いてくるケイナ。
いや、相手にしたくない状態なのは分かりますけど本人に聞いてくれませんか？

「……大方^{おおかた}何かいい仕事ないですかねえ？だろ、ケイナの事知ったからな」

「ふうん……」

「あ、待てケイ……ったく、まずは正式な謝罪をと言っただろう？」

ブツブツ言ってた団長さんも漸^{よつや}く私とケイナの会話に気付いて参加してくる。

「ああそうだった「ったく、」……謝罪と言う名の営業だったな」

「おい！・・・いやもう何も言うまい」

そう言つてタメ息を吐きながらケイナに向き直る団長さん。
弄^{いじ}りに対する対処は習得済みとばかりにその場の空気を区切つてい
て。

その隣ではカロリアさんが団長さんのこの技能が少しでもあればと
クフトを生暖かい目で見ている。

そして見られているクフトはなぜそんな視線で見られているのか理
解できていない様で、訝^{いぶか}しげにカロリアさんを見つめ返している。
それらを傍から見ているとどうしても恋人同士のアイ（愛？）コン
タクトにしか見えないのだが・・・今は全く関係の無い事で、尚^{なお}且
つ当人同士全く自覚してもいない事なので放置する。
多分、何かしら切欠^{きつかけ}があれば・・・だろう。

「さて改めて、私はドレン傭兵団の団長を務^{つと}めているコーネリス・
ドレンと申す者。貴女^{あなた}様はリーロン王国第二王女ケイナ様と御見受^{おみう}
けするが宜^{よろ}しいか？」

「・・・御見受けされてしまったか、どうすればいいと思うカロリ
ア？」

で、そこでカロリアさんに振るんだ？

ああ、この期^こに及^{およ}んでまだ白^{しろ}を切れるか聞いたのか。

「・・・どうにもこうにも、ほぼ確信されてるようですが？」

で、問われたカロリアさんは不可能です・・・と。

「・・・、ではドレン団長」

「は、」

「私と知って、何用か？謝罪などよい、用向きを答えよ」

おおつ王族Ver!!

こうしてるところを見るとケイナも王女様、王族なんだなあ実感する。

なんと言つか、私が居た世界には無かった部類の貫禄かんろくというか威厳というかが伺えるうかがのだ。

私の居た世界には既に、生まれながらにして権力者という貴族や王族といった人種は居ない。

そうして脈々と受け継がれるのは腐った上位者意識、それと思いやり等などの精神の一部欠損、肥大化する貧富格差がほとんど。

極稀ごくまれに天才と呼べる人材が生まれるがそんなもの、デメリットに比べれば些細ちさい過ぎてそういった人種を残すには値しない・・・という事で世界中どこに行ってもそんな人種にはお目にかかれなかった。

・・・のが目の前に居る、と。

そんな、ある意味新鮮な感覚に囚とらわれつつ二人を傍観ぼうかんする。

「はっ、単刀直入に言わせて頂きますと、我が傭兵団を王女殿下の私兵にして頂きたく」

「私兵、ねえ・・・」

「・・・信用されないのも無理はありません。ですが一つ言わせて頂ければ今朝の愚か者は創設メンバーではありません、現在在籍している創設メンバー15名それぞれがそれぞれの理由をもって今この場に居おります」

「それぞれの理由、か」

「はい」

あれから暫く話し合い、王都に着くまでに折をみて返答するとして団長さんを団に帰したケイナ。

「・・・あれ、どう思う？」

「パイプは繋いでおいても良いかもしれませんが、今のところ使用道がありません」

「そうなのよねえ」

ケイナとカロリアさんが話し合っているのを横目に少し離れた所で二人の話し合いを観察する私。

「ですが、ケイナ様の下へ馳せ参じた彼等の「それぞれの理由」は評価してしかるべきと存じます」

「ま、そうね・・・情けは人の為ならず、昔の人はよく言ったものだわ」

その言葉がこの世界にもある事にちょっと驚く。

「何？」

「いや、大した事ではない」

顔に出てしまった様で意を問われたが、ホント大した事じゃない。

「じゃあいいじゃない、言ってみなさいよ」

「・・・ケイナがそんな言葉を知ってた事に驚いただけだ」

から、素直に答えたのだが・・・

「・・・それはあたしをバカにしてるのかしら？」

と目以外は非常ににこやかに尋ねてくるケイナ。

チラッと隣を見るとカロリアさん、なにやら意地の悪そーな微笑ほほえみしてるしクフトはクフトで尊敬する上司を愚弄ぐろうされた部下っぽい感覚で私を睨にらんでる。

「はあ、・・・別にそういう意味で言ったのではない。まああの団長達の事をそう思うのなら報酬をその土地として全滅した門街の再建でもやらせたらどうだ？あいつらにも家族は居るだろうしそれに早く再建しないと他の門街に皺寄しわよせいくだろ？」

なんとなく、ケイナの逆鱗ぎゃくりんかそれに近いものに触れた様だと察し話題変更してみたのだが・・・

クフトはともかくケイナとカロリアさん、虚きみを衝つかれたようなポカンとした顔でこちらを見ている。

「・・・何か変な事言ったか？」

「あゝそうじゃないわ、なんていうか・・・まあ、その意見採用つて事で」

「あゝ採用、ね・・・」

「ほんと、アナタは何者なんでしょうね？」

カロリアさんの疑うような何ともいえない視線に耐えかね、もう一度雰囲気を変えるため足元にあった小石を拾って投げる。

「ッ！」何者！？」

カロリアさんとクフトの息の合った誰何すいかの声に感心しながら思った事を口にする。

「大方おおかた、ファスゴトで話にあった山賊の斥候とかでしょ服装的に。森の此方側こちびに水辺はココだけだから皆ココで泊まるし品定めにはもってこいだし」

『本能に従った』と言われてもおかしくない程瞬間的に飛び出したクフト、とそれを見越したかの様にケイナをフォローする位置に立つて周囲を警戒するカロリアさん。

「息ピッタリだねえ姫さんや？」

「爺くさい、姫さんゆーな、でしょ？」

的確に返しつつ賛同するケイナとニヤニヤしあう。

それになんとなく気付いて複雑な表情を見せるカロリアさんと待つ事数分、クフトが手ぶらのまま帰ってきた。

「・・・逃げられたのかしら？」

今までいやーな雰囲気で居心地の悪かったカロリアさん、うん、とても底冷えのする様な声色でクフトに問いかける。
詰問と言った方が正しいかもしれない。

「あー・・・っと、別にそういう訳じゃなくてだなあ？」

「・・・ではなくて？」

「あー・・・と、『目』と『耳』を付けて逃がした」

意外や意外、クフトもそれなりに考えて行動できる様で。

ただ普段と明らかに違う雰囲気のカロリアさんに動揺してる様子。

「「ん、ならばヨシ」」

「・・・ふう」

いや、たまたまだとケイナとカロリアさんの言葉がかぶった事とクフトの安心した様な溜息ためいきで発覚した。

「で、明日はどうする？下見に来たって事は襲う気だろう？」

「そうね、クフト」

「ハッ」

「とりあえず、あなたはこれから野営中の皆さんに『襲撃の可能性あり』と注意喚起してきなさい」

「了解っ！」

早速隣の商隊まで歩いて行くクフト。

「あたし達は明日に備えてとっとと寝ましょうか」

うわ・・・

「そうしてクフトはパシラされるのでした・・・と、おやすみー」

チャンチャンみたいな古い擬音が聞こえそうな台詞を吐いて、焚き火の前から動かず手をヒラヒラさせる私。

「そゆことーおやすみー」

そう言つて面倒な雑事をクフトに任せてカロリアさんと共に馬車に入っていくケイナ。

女性陣はやっぱり女性である事とやんごとない御身分の方でもあるので馬車の中で眠る。

対して男性陣は焚き火の周りで雑魚寝。

しょうがないと言えばしょうがないので不満を覚える事もないのだが・・・

「カロリアまた成長したんじゃない？特にここら辺が」

「や、止めてくださいっ」

みたいな、どこぞの修学旅行の夜女子の部屋Ver的な事は他所でやってくれないかと思う。

「毎日同じ事して飽きたり・・・しないんだろっなあ・・・」

そんな独り言を洩^もらしつつ、その日は静かに更^ふけていった。

第15話（後書き）

復帰したはいいものの、私の周辺環境ががらりと変わっているので
超不定期投稿となりそう・・・です・・・

元々思い付きで始まった自己満足小説とは言え読んでくださってた
方々には申し訳ないのですがorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3035f/>

初心者神様の世界管理日報

2010年11月16日07時36分発行